
遊戯王 ~Parallel Story~

ミミック

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王～Parallel Story～

【Zコード】

Z8735Z

【作者名】

ミミック

【あらすじ】

5Ds・ZEXALとは別の世界一

「N.O.」と呼ばれるカードを遺し、行方不明となつた恩人。二人は恩人の手がかりを求め、様々な困難に立ち向かう。

初投稿です。

低クオリティ、不定期更新ですがよろしくお願いします。

プロローグ（前書き）

初めまして。
ミミックです。
初の遊戯王作品なので、ミス等田立つと思いますが、応援お願いします。

プロローグ

とある豪邸

四人の人影があつた。

長身の青年、小柄な少年、二人を心配そうに見る少女。そして、贅肉をゆらし怒りをあらわにしている景気の良さそうな男
「あなたの悪事はもうマスコミに広めた。どうあがいても、終わりだ。」

小柄な少年はけらけらと笑いながら男を挑発する。

「……何故だ！何故そんな忌まわしい小娘を庇う！」

男は唾を散らして怒鳴った。長身の男は、淡々と
「それが、今回の仕事だからだ。」

と言つた。

凍てつくようになつて、午前2時ごろの出来事だつた。

第1話・悪党よつも悪党で（前編）

今回テュエル無しです。

あれ？入れるつもりだったのになあ…

第1話・悪党よりも悪党で

とある豪邸

少女、緋色かなめは疲れていた。

その原因は

「おいっ！飯はまだか！！」

と贅肉を震わせ怒鳴っている、成金 金造なっかね きんぞうという彼女の養父である。彼は元々緋色家の経営する会社の幹部にあり、かなめの父が行方不明になつた後社長の座を乗つ取り彼女を引き取つた。

彼は彼女の親族がないのを良いことに、昼夜彼女をただ同然で働かせ、時には虐待をしている。

自殺。

まだ幼い少女にそう考えさせるには、十分な環境だった。

「はあ……」

仕事の終わった夜、彼女の机にはナイフが置かれていた。

「お父様、お母様」

最愛の二人を想い、喉元にナイフを刺そうとしたとき、

「痛つ！」

別の声がしたかと思うと、ナイフの刃を掴み、喉元寸前のところで止めていた。

「あ……あなたは……？」

と、言うと年にしては小柄なその少年は

「雑賀 奏太……探偵さ」

と言つて、何が面白かったのか、けらけら笑つていた。

「……探偵さんが、なんの用ですか？そもそも、どうやって中に？」

「僕の相棒がここに警備を引き付けて、その間に君のところに来た。後、なんの用かつてーと、君のお父さんから、娘を助けて欲しいって依頼が来てね。警察は、しょーこふじゅーぶんつて動かないらしい。ホント警察つてのは…」

彼は愚痴を言つてゐるが、かなめの耳には入らなかつた。父は自分の事を守ろうとした。そのことで彼女は頭が一杯だつたのだ。

「じゃ、早速ずらかりますぜ！」

一通り愚痴を終えた奏太は、かなめの手を掴んだ。

「で、でも出口はすごい鍵がかかつて…」

「セキュリティのこと？おいおい、俺達がどうやつて侵入したと思つてるんだい？んなもん、ハッキングして壊したよ。」心配するかなめにドヤ顔で言う奏太。

「ハッキング…？本当に何者なんですか？」

「だから、ただの探偵だつて！」

屋敷を脱出した奏太とかなめ。

「おーい、銀さん」

奏太が大声で呼びかけると、

「その呼び方止めろつて」

と、いかにも探偵だ、

という感じの服を着た男があらわれた。

「依頼の人物と証拠は？」

「バツチリつす！」

冷静に聞く男と、元気な奏太。一人の温度差に戸惑つてゐるかなめに

「君が、緋色かなめか。俺は四条銀次。君の父親から依頼を受けた時、彼から手紙を預かつてゐる。」

と、言いかなめに手紙を渡した。直後：

「ぜえ…ぜえ…まで！」今回の依頼上での要注意人物、成金金造があらわれた。

「「」したことをして……ただですむと思つなよー」 「「」ことへ。」興奮する金造に、あくまで冷静な銀次。

「とぼけるなー・つひの警備員、セキュリティをひとつ残さずボロボロにしやがつて……犯罪だ！」

「犯罪……ねえ。お前がしてきた悪事の数々に比べれば、可愛い物じやないか。」

「なんの事だ……！」

「はいはーい！証拠ならあるよー」

一人の会話に割り込む奏太。

「あなたの部下から聞いたよ。不正献金、使い込み…後、家政婦の皆さんから、かなめちゃんへの扱いも聞いたよ。あんた、人望ないねえ……」

証拠をつき出され、絶望する金造。

「な……何故だ！何故お前らはこんななんの足しにならん忌まわしい小娘を助ける為にここまでする…」

銀次は、多少呆れながら、

「それが…俺の仕事だからだ。多少無理しても父親・依頼主の要求には答えねえとな。」

と、言つた。

「まあ、お前の言つることも一理ある。確かに俺らのやつた事は犯罪だ。」と、言ひ

「「」テュエルだ。お前が勝つたら俺らを警察につきだすと良い。お前が負けたら、警察へ…どうだ？」

「「」テュエル…だと？良いだり。貧乏じときが、思ひしると良い…！」

「 そ う か … な ら … 」

銀 次 が 不 敵 に 笑 い 、

「 「 デ ュ エ ル ! 」 」

闘 い が 、 始 ま つ た 。

第1話・悪党よりも悪党で（後書き）

すいませんでした…

途中ノリノリで書いていたらいつの間にか遊戯王じゃなくなってしまった
急いで展開修正したら、なんといつ超展開
一応ここでテュエルを挑んだ理由は次話で描写
します。

主要な登場人物 1（前書き）

とりあえず、主な登場人物です。

この話の設定は仮面ライダーウをかなり参考に
しております。

四条 銀次 (しじょう ぎんじ)

性別：男

年齢：21

本作品での主人公。

12歳のとき、とある理由で家族に見放される。途方に暮れていたところを雑賀 仁朗に拾われる。基本的になんでもこなす高性能お兄さん。

ハードボイルドを氣取るが、奏太達に振り回されボロが出ることが多い。少し変わった趣味をもつ。

使用デッキ

【悪魔 + エクシーズ】

雑賀 奏太 (さいが そうた)

性別：男

年齢：16

雑賀 仁朗の息子であり、父の情報網を受け継ぎ 探偵業では主に情報収集をする。

オタク趣味を持つていて、よく謎発言をしている。

見た目は背が低く女の子っぽく（というより男の娘）一目で男と分かつたのはかなめくらい。

銀次を兄のように慕っていて、「銀さん」と

某侍漫画のような愛称で呼んでいる。

使用デッキ

【トーケン】

緋色 かなめ (ひいろ かなめ)

性別：女

年齢：12

大企業「緋色カンパニー」の一人娘。

両親が行方不明になり、成金家の養子になる。虐待と労働に嫌気が差し、自殺を図ろうとしたところ奏太に救われる。

幼い時から苦労しているので、大人びた性格で、銀次、奏太の暴走を止めたりすることも。

洞察力も鋭く、奏太を

一目で男と見抜いた。家事の腕は一級品だが、デュエルの腕は発展途上。使用デッキ

【スター・ダスト・ドラゴン】

雑賀 仁朗（さいが じんろう）

性別：男

年齢：41

奏太の父親であり、

「N.O.」のカードを一人に遺した張本人。（5Dsの雑賀とは無関係）

行方不明になる前は裏社会の情報屋を営んでいて、多数の人物を破滅させていた。せめてもの償いとして、身寄りのない子供を養っていた。

ある日、デュエルモンスターZの脅威に気がつき、特に才能のある二人にカードを託し、行方をくらます。

主要な登場人物 1（後書き）

銀次 鬼柳（満足町長ｖｅｒ）

奏太 バカテスの秀吉

かなめ 遊戯王TFの瀬良あゆみ

仁朗 まんま5D'sの雑賀
容姿のイメージです。

質問、間違いなどありましたらお願いします。
次回は本編です。

第2話 「Z.O.」のカード（前書き）

今回は「テュエル」です。

まだ慣れていないので、間違い・疑問などございましたら、
ご指摘お願いします。

荒らし、中傷などは作者の「やがつぶー」になりますので、NGです。

第2話 「N.O.」のカード

side：銀次

「「デュエル！」」

四条銀次 LP8000

成金金造 LP8000

「わしの先行、ドロー！」

金造がカードを引く。

さつきの奇妙な自信、野心的な行動…あのカードを持つていると思うが…

「わしは、カードを一枚セットし、ターン終了！」

成金金造 LP8000

手札5枚

あまり動かないな…
「俺のターン、ドロー。俺は、ジャイアントウイルスを召喚。そのままダイレクトアタック。」

球体のウイルスが、金造を襲う。

ジャイアントウイルス ATK1000

成金金造

LP7000

「罠発動！ダメージ・コンデンサー！手札を一枚捨てて発動。受けたダメージ以下の攻撃力を持つモンスターを特殊召喚する！いよいよ！成金忍者！！」

成金金造

手札4枚

成金忍者 ATK500

金造の場に、豪華な装飾の忍者（？）が現れた。

「…俺は強欲な力ケラを発動。カードを一枚伏せて、ターンエンド。」

「

四条銀次 LP8000

手札3枚

「ふん！その程度でわしに勝てるか！ドロー――！でよ、黄泉ガエル！」

頭の上に輪がある力エルが現れる。なるほど、せっかくコストとして墓地に送ったのか。

「更に成金忍者の効果発動、手札の罠一枚を捨て、デッキからLV4以下の忍者を特殊召喚する！現れる、機甲忍者フレイム！」

機甲忍者フレイム ATK1700

「機甲忍者フレイムの効果で自身のLVを一つあげる！更に、黄泉ガエルをリリース、LV5の機甲忍者アースを召喚！」

機甲忍者アース ATK1600

機甲忍者フレイム LV4 5

LV5が一体：くるか？

「さて…まずはその目障りな肩を片付けよう。アースでジャイアントウイルスに攻撃！」

四条銀次

LP7400

「ジャイアントウイルスの効果！戦闘で破壊された場合、相手に500ポイントのダメージを与える、デッキから一体のジャイアントウイルスを特殊召喚する！」

成金造

LP6500

「構わん、フレイムよ、その屑を蹴散らせ！」

「罠発動！ドレインシールド！相手の攻撃を無効にし、その数値分回復する。」

四条銀次

LP9100

「小賢しい……わしはフレイムとアースでオーバーレイ！エクシーズ召喚！深紅の影よ、我が為に下僕に無敵の肉体を！？12機甲忍者クリムゾン・シャドー！！」

金造の腕に、12という刻印ができ、深紅の忍者が姿を現した。やはり？か。この男が急速に力をつけたのも、このカードのおかげか……。

「わしは成金忍者を守備表示に変更し、ターンエンド。このカードがある限り、わしに敵はいない！」

成金金造 LP6500

手札3枚

「……俺のターン！この瞬間、強欲なカケラのカウンターが一つの
る。」

強欲なカケラ（0 1）

「俺は、死者蘇生を発動。墓地から、ジャイアントウイルスを特殊召喚。……？はお前だけのものつてわけじゃない。俺は、三体のモンスターでオーバーレイ！破滅の意志よ、俺に力を！エクシーズ召喚！？96ブラック・ミスト！！」

俺の前に、96の刻印を持つ、残虐性を露にした悪魔が現れた。

side：奏太

やつぱり、あのおっさんN.O.のカードを持つてたか。

「あの…なんで銀次さんはデュエルを挑んだんですか？あのまま警察につきだせば、侵入もうやむやにできたかも知れないのに…。」
かなめちゃんが不思議そうに聞いてくる。

「ん…、あの『N.O.』ってカードがあるだろ？あのカードはカード自体が強力な力を持つていて、持ち主の精神に変調を起こす。僕と銀さんは、あいつがそのカードを持つていると考えてデュエルを提案したんだ。」

「そんなカードを、なんで集めているんですか？」

「えっと、何て言えば良いかな…？」

僕が返答に困つていると、銀さんが動き出した。

side：銀次

「貴様もN.O.のカードを…」

金造が驚いている。

「まあ、この力の代償が無いつて訳じゃない。」

そう言って、俺は自分の灰色に変色した片目を指差す。

「このカードの影響を防ぐための手段はとつてあるさ。」

「貴様…何者だ？」

「しがない探偵さ、話はここまで。俺はトランス・デーモンを召喚！更に効果発動！暗黒界の刺客力ーキを捨て、攻撃力を500アップ！」

トランス・デーモンATK1500 2000

「暗黒界の刺客力ーキの効果、手札から墓地に送られた時、相手モ

ンスターを一体破壊する。俺はクリムゾン・シャドーを破壊！」「

「バカが、クリムゾン・シャドーの効果発動！オーバーレイ・ゴーットを取り除き、忍者の破壊を防ぐ！」

クリムゾン・シャドー（〇一二一）

「なるほど、そういう能力か。なら問題ない。ブラック・ミストでクリムゾン・シャドーを攻撃！ブラック・ミストの効果、オーバーレイ・ユニットを一つ取り除くことで、攻撃対象の攻撃力を半分にし、その数値分アップする！」

クリムゾン・シャドー ATK2400 1200
ブラック・ミスト ATK100 1300

「ぬう…ならば、もう一度効果発動！」

クリムゾン・シャドー（〇一二一〇）

成金金造 LP6400

「これで邪魔がなくなつた。トランス・デーモンで成金忍者を攻撃！」

不気味な笑みを浮かべた悪魔が、忍者を切り裂く。

「俺はカードを伏せ、ターンエンド。」

四条銀次 LP9100

手札〇枚

「わ…わしのターン！わしはクリムゾン・シャドーを守備にし、モンスターをセット、カード一枚伏せターンエンド！」「なら、そのエンドフェイズにサイクロン発動！お前の伏せカードを破壊する。

「何！？」

破壊したカードはミラフオか、危ないな…

成金金造 LP 6400

手札一枚

「俺のターン、ドロー！強欲なカケラのカウンターが一つのる。」
強欲なカケラ（1 2）

「そして強欲なカケラの効果！カウンターが一つ乗ったこのカードを墓地に送り、一枚ドロー！」

四条銀次

手札3枚

「トランス・デーモンの効果で、俺は暗黒界の武神ゴルドを墓地に送る。ゴルドの効果、手札から墓地に捨てられた時、特殊召喚する。」

暗黒界の武神ゴルド ATK2300

トランス・デーモン ATK1500 2000

「終末の騎士を召喚。効果発動。デッキから闇属性のモンスターを墓地に送る。冥界の魔王ハ・デスを墓地へ！」

終末の騎士 ATK1400

「更に、墓地の三体の悪魔を除外し、ダーク・ネクロファイアを特殊召喚！」

ダーク・ネクロファイア ATK2200

人形を持った、俺のお気に入りのモンスターが現れる。

「なんだ、その気味の悪いモンスターは…」

金造が震えながら言つ。「失礼な。こいつの良さが分からんか！…」

同意を求めようと、奏太達の方を見ると、

「嫌、こええよ。銀さん。」

「ひいい…」

こんな反応が返つて來た。畜生、泣きたくなつてきた…。

「ど、とりあえず、ネクロフュニアでクリムゾン・シャドーを攻撃！

念眼殺！」

ネクロフュニアが、目を見開くと、クリムゾン・シャドーが燃えて消えた。やつぱりカツコいいと思うんだが…。

「トランス・デーモンで伏せモンスターに攻撃！」

リバースモンスターは青い忍者。この状況じゃ無意味か。

「いけ！ ゴールド、ブラック・ミスト！」

「ぐあああ…！」

成金金造 LP 6400 2700

「俺のターンは終了。さて、お前の力を見せてみろー。」

「ぐ、わしのターン！…このグズが！」

そう言つて、金造はカードを握り潰した。

「自分のカードを…」

「黙れ！ わしの役に立たぬカードなどアリマジト…」こいつして当然じゃ

…！」

醜く吠える金造。

「わしはターンエンデー！」

成金金造 LP 2700

手札（一一）枚

「…俺は、お前に對して少し甘かつたらしい。俺のターン…俺は、魔法力ード、受け継がれる力を發動！ ゴールドをリリースし、その攻

撃力分の数値をネクロフィアに与える…！」

ダーク・ネクロフィア ATK2200 4500

「攻撃力…4500！？」

「カードをグズ扱いするお前に、デュエリストを名乗る資格は無い！行け、ダーク・ネクロフィア…！念眼殺…！」

「ぐおおおおお！」

成金金造 LP 0

闘いの、幕が閉じた。

第2話 「N.O.」のカード（後書き）

初のデュエルパート、いかがだったでしょうか？

忍者はこんなに弱くない！…と、思う方。今回はただのネタキャラ（名前的にも）なので、「勘弁下さい。

何故か成金 上から目線 殿様 家来の忍者という。図式が出来てしまつて…ちょうど忍者のN.O.もあつたし。

次回は解決後、主人公達の謎に迫ります。

第3話 バカと家計と決闘者（前書き）

よひやくでもました。

今日は、奏太の「ヒュエルです。
パロが多めです。

第3話 バカと家計と決闘者

side:銀次

「テコエル終了後、成金は捕まえられ、N.O.のカードも無事回収する」ことができた。そして、いつもの日常が始まるはずだったが…。

「コーヒー、出来ました。」

そう言つて、俺の前にコーヒーを持ってくる緋色かなめ。

「…どうじつけになつた」

依頼が済み、俺達は緋色父が書いた手紙を読んだ。そこには、かなめに対する謝罪と…

『大変図々しいとは存じておりますが、まだ事情がありかなめを引き取る事ができません。どうかあなたの方の方でかなめの面倒をみてやって下さい。』

という内容が書いてあつた。しかも断れないように弁護士雇つているらしい。あの狸め…。

幸いなのが、かなめが申し訳ないと感じており、家事を率先して手伝ってくれることか…。

「何このコーヒー、美味しいなああ…！」

奏太が大袈裟に驚いている。伊達に家政婦やってたわけじゃないのか。

「ほり、銀さんも飲んでみ！」

「その呼び方止める… つておいいいい… そんなに砂糖注ぎ込むなああ…！」

「ああ、『めん。間違えちゃった』

「なんだその はああ…！」

「落ち着いて下さる銀次さん！ つてなんの事ですか！」

「ああ、済まない。つい頭に血がのぼって、訳のわからんことを…。

「

どつも奏太といると、なんといつか、調子が狂う。初めて会った時
も…

～寝室にて～

「俺は、四条銀次。
よろしく頼む。」

「俺、奏太ってんだ、よろしくな。普通はさ、新入りは下りて相場
が決まってんだけど、大丈夫。俺は、こだわらない。」

.....

と、一段ベッドの方を親指で差し、どじぞの囚人のような事を
を言っていた。後でわかつた事だが、そもそもこいつは下のベッド
の方が好きらしい。少しでも親切だなと思っていた俺がバカだった。

「そうだ、良い事思いついた。お前、俺の『テッキ』と『ユエル』

某アツー！漫画調の急な奏太の提案。

「何故だ？後、ネタ振られても乗らんぞ。」

「いやあ、かなめちゃんが、デュエルというものが見てみたい。つて言つてたからさ。歓迎会も含めて。」

「今は無理だ。家計簿書いてるから。」

「家計簿つて親かよ！」

「書き出した理由はお前の電気代が必要経費以上にかかると家計がピンチだからだ！」

「アニメ視聴、ネトゲは必要経費だ！」

「黙れ！しかも最近は有料課金しやがつて！…ますます家計は火の車だよ！」

と、またテンションがおかしな方向に行きかけた時…

「雑賀奏太はいるかー！」

と、外から大声が響いた。

「やばつ…」

と言つて奏太が隠れる前に玄関口が勢いよく開いた。

「どなたです？」

「私はデュエルアカデミア生徒指導部の古田です！雑賀奏太の指導にきました。」

「『』苦労様です。奏太なら…」

と言いつつ、奏太を引っ張りだす。

「ちょ、待つ…。銀さんの裏切り者オオオオオ…！」

「誰が裏切り者だ。今回は何した？」

「ちょっとテストの点が低かつただけだって！」

「ちょっとで教師が来るか！前だつて自分が恣割つたの備品の情報改竄して学校側の責任にしたのバレて呼び出し喰らつたろ…！」

と言つて、奏太を教師の前につきます。

「雑賀。お前のテストの点では、はつきり言つて留年だ。そこで、追試デュエルを行う！」

「へ…？デュエル？丁度いい、かなめちゃんも見てるといいよ…！先生、見学者つけていいですか？」

「ああ、いいだろう…！」

「では、行きますよ！」

「『デュエル！』

side：かなめ

古田康夫 LP 8000

手札5枚

雑賀奏太 LP 8000

手札5枚

「先行は僕が、僕のターン！」

奏太さんのターンランプが光り、奏太さんがカードを引く。一応一通りルールを教えてもらつたけど……どんな戦い方があるんだろう？

「僕は、永続魔法、スライム増殖炉を発動します！カードを一枚伏せてターンエンド！」

雑賀奏太 LP8000

手札3枚

モンスターをださない！？手札になかったのかな…？

「トーケンか！俺のターン！俺はカードを一枚セット！そして、大嵐を発動！ファイールドの魔法・罠を全て破壊！」

強風が魔法・罠を破壊していく。

「カウンター罠、魔宮の賄賂！先生の大嵐を無効にします！その代わり、先生は一枚ドローして下さい。」

「む……やるなー…ドロー！」

古田康夫

手札4枚

「よし！俺は死皇帝の陵墓を発動！ライフを2000払い、古代の機械巨人を召喚！」

古代の機械巨人ATK3000

熱血そうな先生の場に、大きな巨人が出てきた。

「いきなり古代の機械巨人！あなたはなんて先生なんだ！」

いきなり先生を讃める奏太さん。

「讃めても何も出ないぞ。行け、古代の機械巨人！アルティメット・パウンド！」

雑賀奏太LP5000

大きくライフを削られちゃった。大丈夫かな…？

「俺はカードを一枚セットし、ターンエンド！さあ、お前の力を存分にはつきするんだ！」

古田康夫LP8000

手札1枚

「では遠慮なく。僕のターン、ドロー！スタンバイフェイズにスライム増殖炉の効果発動！スライムモンスタークンを特殊召喚！」

スライムモンスタークンATK500

「フィールド魔法、湿地草原発動！LV2以下の水属性の攻撃力が1200上昇します。」

スライムモンスターートークンATK1700

「永続罠発動、暴走闘君。このカードがある限り、攻撃力は1000上昇し、戦闘では破壊されません！」

スライムモンスターートークンATK2700

「ほう、やるじゃないか！だが、まだ足りないぞ！」

「まだまだ行きますぜ！装備魔法下克上の首飾りを発動！このカードを装備した通常モンスターの攻撃力は戦闘時レベルの差×500ポイントアップします！」

「なんだって！？」

「行け、スライム！古代の機械巨人を攻撃！」

スライムモンスターートークンATK6200

え…？スライムモンスターートークンつてもともと攻撃力500だよね…？

「ぐうう…」

古田康夫 LP 4800

「僕はカードを一枚伏せてターンエンド！」

雑賀奏太 LP 5000

手札0枚

「く…俺のターン！魔法カード、トレード・インを発動！手札の古代の機械巨竜を捨てて、一枚ドロー…！」

古田康夫
手札2枚

「カードを一枚セット、モンスターをセットし、ターンエンドだ！」

古田康夫 LP 4800
手札0枚

「先生の方は動かないな…やつぱりあんなモンスターいたらキツイのかな？」

「このまま決めてやるぜ！僕のターン！スタンバイフェイズ、スライムモンスタートークンを特殊召喚！」

スライムモンスタートークン ATK2700

「行けえい！スライムモンスタートークンで伏せモンスターに攻撃！」

「罠カード、聖なるバリア＝ラーフォース！」「げつ！」

奏太さんのスライム達が全滅した。

「一枚のカードで戦況がひっくり返る。覚えておくんだな！」

「エクセレント！僕のスライムをいつも簡単に倒すなんて！」

奏太さんは飄々とした態度を崩さない。といつか、先生に對して失礼な気が…

「はつはつは、よせよ。」

…気にしてないみたいだけビ。

「僕は、ターンエンド…」

雑賀奏太 LP 5000
手札1枚

「俺のターン、ドロー！俺は死者蘇生を発動！甦れ、古代の機械巨竜！」

古代の機械巨竜 ATK 3000

「それはまずい、罠発動、奈落の落とし穴！古代の機械巨竜を除外！」

「なに！？」

「俺はターンエンド！来いつ！雑賀あー！」

古田康夫 LP 3800

手札0枚

「……僕のターン、ドロー！スタンバイフェイズ、スライムモンスター－ターンを特殊召喚！」

スライムモンスター－ターンATK2700

「僕は、アームズホール発動！デッキトップから一枚墓地に送り、下克上の首飾りをデッキからサーチ！バトル－スライムで伏せモンスターを攻撃！罠発動！ストライク・ショット。モンスター－一体の攻撃力を700上昇し、貫通効果を『える！』

スライムモンスター－ターンATK3400

「セットモンスターはマシュマロンだ！」

マシュマロンDEF500

古田康夫 LP1900

「くつ……マシュマロンの効果、セットされたこのモンスターを攻撃したプレイヤーに1000ポイントのダメージを『える！』

「うわつと！」

雑賀奏太 LP4000

「僕は、もう一枚スライム増殖炉を発動しターンエンド。」

雑賀奏太 LP4000

手札0枚

「俺のターン…ドロー…」

先生がドローしたカードを見る。

「（セットカードは雑賀のデッキ相手じゃ余り使えないな。）俺はモンスターをセット、ターンエンド！」

古田康夫 LP1900

手札0枚

「僕のターン、ドロー！…スタンバイフェイズに一体のスライムモンスタートーケンを特殊召喚！」

スライムモンスタートーケン×2 ATK2700

「だが…こちらには戦闘破壊耐性を持つマシュマロンがいる…このターンでは決着はつかない…！」

「…それはどうかな？僕は、速攻魔法、エネミーコントローラーを発動！一つ目の効果によつて、マシュマロンを攻撃表示に変更…！」

マシュマロン ATK300

「とおどおめえだー！スライムでマシュマロンに攻撃…」

「つおおおー！」

古田康夫 LP0

「……なあせだあああ！」

外から奏太さんの悲鳴が聞こえます。
デュエルが終了し、追試から解放されたと思っていた奏太さんだけ
ど、先生曰く

「IJのデュエルは留年をかけた物で、まだ補習をしてもらひが必要が
ある。わあ、先生と楽しく一対一の勉強会だ！」

だ、そうです。

「嫌だ、僕は、うけたくないいい！」

と、危うく鬼になりそうな声で抵抗していた奏太さんですが、

「ひっせえーまた家計簿の計算ミスつたじゃねえかー！」

と、鬼のような顔をした銀次さんが奏太さんに打たれ、ぐつたりと
したまま連れていかれました。最初は落ち着きのある、少し近よ
り難い人達だと思っていましたが、私を嫌な顔一つせず家に招いて
下さり、優しい方々でした。

「ええっと、この費用が…はあ…？あいつまた有料課金を…ああも
う…！」

……もう少し、もう少し落ち着きのある方だと思つてました。

第3話 バカと家計と決闘者（後書き）

一回目のデュエル、
どうでしたか？

今回出てきた古田教諭は【死皇帝の陵墓+クロノス】
です。ちなみに、

伏せてあつたカードは

黄金の邪心像×2
禁じられた聖杯

です。

前者は大嵐無効+サイクロンが来ない
後者はトークンだつたから意味なし
で、完全に死に札でした。

奏太は【トークン】ですが、【スライム増殖炉】寄りです。
使い方

強化して貫通つけて
殴る。

魔法、罠はカウンターで守る。

今回のデュエルも間違いなどありましたら指摘お願いします。
感想もお待ちしております！

第4話 口常と黙変（前書き）

今回は、新キャラ登場回 + 次回への伏線です。

デュエルはありません。

第4話 田常と黙変

side・奏太

僕と古田教諭の壮絶な（？）補習が終わり数日、僕はある重要な仕事をこなしていた…

「よしー！ トリシコ5万でらくさ…あいたあつー！」

「お前のデッキで使わねえだろーがあああ…！」

銀さんが思い切り僕の頭を叩く。

「痛いよー…依頼はビリしたの？」

「さつき終わらせて來た。今回はソ。絡みじやあなかつたしな。
すぐにな済んだ。」

あれ、浮気調査だったよね？ 速くね？

「そんなことよ、トリシコだよトリシコー。こぞとこつぽにこじりんなデッキにも入るのにー。」

「都合の良いこと言つてんじゃねえ！ 絶対コレクション目的だろー。そもそもお前のせいで金がねえんだよー。」

「これだけは譲らないよー！」

僕にだつてプライドつてものがある。

「…臓器つてや、ある程度売つても大丈夫らしいぞ？」

「すいませんこや」めんなさい。」

「この駅… やると言つたら マジでやる『凄み』がある…。」

「やつにいえば、かなめは？」

「なんでも、アカデミア編入の手続きだとか。今は長期休暇中だから、新年度から編入するんだって。学費はかなめちゃんの父さん持ちだつて。」

「くえ？あの狸もそれなりの気遣いはあるのか。」

銀さんもかなめちゃんの事気にしてたみたいだから良かつた良かつた。
さて、僕はブログの更新でもするか。

side・銀次

「じゃ、俺は買い物行つてくるわ。」

「まじで！？じゃ、限定フイギュ「黙れ」ひどい…。」

いい加減こいつの変な趣味は直らないのか。見た目は女の子のような纖細な顔立ちなのに、妙な事に興味を示す変わり者だ。

商店街に着くと、俺は顔馴染みのいるハ百屋に行くことにした。

「おう！銀次じゃねえか！-秦ちゃん元気か？」

と、威勢の良い声で呼び掛けてくるのは高校時代の同級生である
設楽 しだら 謙二 じょうじだ。こいつは、見た目こそ強面だが、子供好きで優しい

男だ。忙しい時は、まだ小学生だった奏太の面倒を見てもらつていた。今は家業を継いで八百屋をやっている。

ちなみに、いまだに奏太のことを女の子だと勘違いしている。ちなみに、いまだに奏太のことを女の子だと勘違いしている。

「おう、あいつは憎たらしい位に元気だ。いつものくれ。」

「あいよ。やっぱ女の子はそのくらい元気じゃないとな。」

「だから、あいつは男だ。」

「ははは、今日はエイプリルフールじゃねえぞ。」

「冗談を受け流すように笑いながら、いつもの野菜を受け取る。

「いいのか？そいつらは形が悪くて売れなくなつた野菜だぜ。なんだったらタダでやるけど。」

「味は変わらんしい。半額にしてくれるだけありがたい。」

「お前、なんか主夫してるな？」

「失礼な。まだまだ21だ。」

まだここ一帯は「ういつた野菜に対して偏見を持っている人が多い。

おかげで家計に大助かりだが。

「ま、買い取り手が無くて困つてたんだ。ありがとう。今度は奏ち

やん連れて遊びに来い。うちの家族が喜ぶから。」

「ああ、また今度な。」

世間話もそこそこに、譲一と別れる。

遊びに来い、か。奏太は女の子扱いされるのを嫌がるからな。いい加減、慣れればいいのに。

しかし、今日は平和だなあ…。

s i d e : かなめ

転入手続きが終わり、私に一つ問題があることに 気付きました。

「試験用に、デッキ組まないと…」

私が転入するのは、奏太さんと同じデュエルアカデミア。父様からは十分な学費を頂いていますが、なるべく残しておいて銀次さん達の助けにしたい…そこで、成績次第では格安で通う事のできる デュエルアカデミアを選びました。あそこなら、将来的に有利な仕事にも就けるはずです。

しかし、自分のデッキを持つてない。父様が残していったデッキがあるのですが、デュエルアカデミアは狭き門…。私でも 使いこなせるよう調整をしておきたいのです。

うんうんと考え込んでいると、

「…大丈夫か？何か悩みがあるなら、相談に乗るぜー。」

と、元気な声が聞こえました。顔をあげると、
髪の短い、元気そうな女の子がいました。

「えつと、実は…」

普段、余り人に弱音を吐かないように努めていたつもりですが、この子の前では隠し事が出来ませんでした。

「なるほど……カードが足りないと。わかつたーあたしのカードをあげるよーー！」

余つたやつだけだと 照れ臭そうに頭をかいている彼女に、

「あ、ありがとうございますー私も、どうしたら良いかと…」

つい嬉しさの余り、泣きそうになってしまします。

「良いつて良いつてーじゃ、あたしの家に行こうよーー私は興野きょうの真子まこ！よひしくー！」

「私は、緋色かなめと申します。」ひいろや、よひしくお願ねがいします！

そう言つて、私は真子さんと一緒にテック調整をしました。

「さて、と。」

今までまとめた情報を総合し、呴く。

「間違いないなあ。」いい最近、妙に勝ち星を挙げているプロトコルリスト、NO・持ちだ。」

そう言つてパソコンの画面を見つめる泰太の田は情報屋の田だ。

「問題な、エリザベスが…かな。ひとつあれば、鑑定元報告だ。」

そう言ふ、メモを取る。最近連勝してこのアーロ、興奮のまま前を…

第4話 日常と異変（後書き）

今年最後、初の日常回です。
どうだつたでしょつか

最後の名前はミスではありません。次回、重要な役割を持って登場します。（多分バレバレですが）

感想、ご指摘お待ちしております。
では、皆さん良いお年を～

第5話 僕らの希望（前編）

明けましておめでとう
「じゃこますーー！」

今年も、遊戯王アケをよろしくお願いいたします。

アクセスPV1000突破ーー！
ありがとうございますーー！

第5話 偽りの希望

s.i.d.e・かなめ

「Jリのカードはどう?」

「じゃあ、Jリのカードを抜いて……」

現在、私達は興野さんの家で「ツキ調整をしてこます。

「……出来ましたー! ありがとうございますー。」

「こいつこいつてー! とつあえず、試しにツキ回してみよつよー。」

それから、暗くなるまで「ユヘルの相手をして頂きました。

「もうすっかり暗くなつたね~」

「あ、すみません、Jリんな遅くまで……」

「あたしは良いけど、かなめの帰りが…そつだ、兄貴~!」

と、興野さんが隣の部屋に声をかけると、優しい雰囲気の男の人が
やつてきました。

「Jリの子、家まで送つて欲しいんだけど。」

「いこよ。トリック調整も煮詰まつてきたことだし。」

「そんな…そこまで迷惑かける訳にはいきません!」

「いじつ。そんなことよつうちの兄貴、プロなんだぜ!…何か参考になると思ひし、一緒にいります!」

自分の兄を誇らしく語る興野さんを見ると、少し微笑ましく思ひのと同時に、羨ましく感じました。

「では、お言葉に甘えて…」

それから、私は車内で色んなお話をしながら家…銀次さん達が待つて…いる探偵事務所に着きました。

「何から向まで、ありがとうございました!」

「ああ、これからはプロデューリスト、きょうの興野^{なき}凪をよろしく。」

と、冗談めかして興野さんのお兄さんは去っていきました。

side・奏太

「……ところ訳なんだ。銀さん、プロに知り合ってます?」

最近見つけたN.O.の情報。僕は銀さんと今後の方針を話し合つていた。

「その呼び方止める。プロか…俺の人脈じゃ、どうにもならんな。」

銀さんも悩んでいる。確かに、僕も銀さんも情報を集めるために、裏の人間との関係を重視してきた。あまり表舞台のスター達とは縁がない。

「 じょうがない、裏から情報を集めて徐々に接近していくか。」

銀さんは前に成金相手に 使つた方針を提案する。 良い案なんだ
けど、金と手間がかかるんだよね。

前はかなめちゃんの父さんからの報酬が多くつたから出来たけど。
そういえば、かなめちゃんは?

「 すいません、遅くなりました!」

「 あ、おかえり~ 随分遅いけど、どうしたんだい?」

「 試験の為のデッキ調整をしてて……」

そういえば、入学試験つてあつたなあ。懐かしい。

「 興野さんといつ親切な方々に手伝つてもらつてきました。今度紹介しますね。」

「 「 興野!~」

僕と銀さんが驚き、かなめちゃんがビックリと体を震わせた。

「 興野… 凪はいたか?」

「 はい! 私を手伝つて下さつた方のお兄様で、プロデューリストさんなんです!~」

銀さんの質問にかなめちゃんが嬉しそうに答える。 『 リラクイなあ

。』

「あー、その凪って人はね、N.O.・持ちの可能性が高いんだ。覚えてるかい？成金との一件。」

「そんな…。嘘です…！凪さんがN.O.・なんてカードを持っているはずがありません！」

ショックを受けているかなめちゃん。まあ、恩人とあの小物が同種とは信じられないかな。

「言いにくいが事実だ。N.O.・は心の闇につけこみ、精神的に影響を与える。

最近、興野凪とデュエルした人間は、皆希望を失い、心が折れてしまっている。」

銀さんは淡々と語る。

「……信じられません。」

そう言い残し、かなめちゃんは自分の部屋に行ってしまった。

side・凪

「はあ、はあ。くつ…」

衝動が押さえられない。このカードを手にして以来、負ける事が一切なくなつた。しかし、相手を容赦なく叩きのめしたい、という衝動が僕を襲うようになつて来た。

僕は今の自分が怖い。

真子でさえも絶望に叩き落としてしまいそう…

「ははは、大部イイカンジに汚染されてンじゃないすかあ？」

いきなり背後から声がしたと思つと、後ろに高校生くらいの男が立つていた。ただ、その田の色は赤黒く濁つている。

「だ、誰だ君は！？」

「俺はトライ。なんて言つンすかね…？N.O.カードを自在に操る者？」

そう言つて爆笑をする男。正氣か？

「N.O.を操る？どういつ事だ！？」

「なに、簡単なことサ。誰かにその衝動を思い切りぶつけてやればいいンすよ。それなりに強い人間にねえ？」

それなりに強い人間…。僕の頭に一人の少女が浮かびあがる。

「かなめって結構強いんだぜ！あたしなんか途中から全然勝てなかつたよ。」

そう嬉しそうに話す真子を思い出して胸が痛んだが、仕方ない。

「一人いた…かなめという人間が…。」

例え真子に軽蔑されても構わない。僕の…いや、俺の家族を守る為の、希望を離さないために。

side:???

「上手くいったツすよ～」

「そうか、『苦労様』」

「でも、なんでＺ．Ｗ．を回収しないんすか？」

「バカが、何回聞いたら理解するんだ？」

ツヴァイが怒鳴る。

「落ち着け、ツヴァイ。Ｚ．Ｗ．の回収しないのは、憑依された人間から可能な限りエネルギーを吸収するためだ。それが一番効率的に我らの目的を果たす手段だ。」

「まつりぐじこすね」

「他に方法が聞け出せなかつた以上しようがない。あの男、つまらん意地を張つて自ら闇に飛び込んだからな。」

「ジンな奴でしたっけ？」

「確か… 雜賀とか言つてたな、ツヴァイ？」

「はい、雑賀仁朗。裏の情報屋でしたね。」

第5話 偽りの希望（後書き）

今回は次回、これから
の伏線です。

次回からじょいよ主人公達の過去に迫っていきます。

正月記念回 新年前夜／探偵の掃除（前書き）

今さらながら、正月特別編です。ぎりセーフですかね？

正月記念回 新年前夜／探偵の掃除

side：銀次

「だーから、掃除しちつてんだろうがー！」

「へふつー？」

昔のオモチャを引つ張り出して遊んでいる奏太を殴る。

「銀次さん、すいません。つい出来心で…」

おや？ 今回こいつは嫌に素直だな。

「わかった。今からは掃除しようつな？」

「いやつすいやつす、絶対イヤッス！ ……ちょっと、無視しないでえーー！」

……反省。こいつが素直な訳がない。某賭博漫画の脣野郎の真似しゃがつて。

「銀次さん。この辺りの『ハビ』しましちょうか？」

「ああ、悪い。置いてくれ。後で俺が奏太も一緒にだしてくる。

「

「あれ！？ 僕ゴミ扱い！？」

今、俺達は新年に向けて大掃除をしている。全く働かない奴がいるが、かなめという強力な助つ人もいて、かなりはかどっている。

「うわあ、僕のコレクションが雪崩になつて……うわあああ……」

訂正。働かない、じゃなくて妨害する、だ。

「おわつたーーー！」

結構な「ハリ」の量で、手間がかかりもう大方になつていた。

「いやーこんなにキレイなのは引つ越して以来だねー！」

「お前少しば働けよーーー！」

「やう言えば、まだお一人の時つて、どうやつて掃除したんですか？」

「この質問…悪意はないよな？」

「ああ、俺と譲二のデュエルで負けたほうが掃除してた。」

「譲二さんつて…？」

「昔の友人さ。」

side：銀次、高校時代

「うし、今からデュエルして負けたほうが勝つた方の家を掃除なー！」

「いや……奏太は？」「女の子に重いもん持たせられねえ……」

まだこいつ奏太の事女だと思つてゐるよ……。

「お兄ちやん、がんばって～」

ちくせつ。奏太、覚えてやがれ。

「くせ、こんな広い家やつてられるかー！絶対に負けねえ！」

「「デュエル！」」

四条銀次 LP 80000

手札 5 枚

設楽譲 LP 80000

手札 5 枚

「先攻は俺だー！俺はキラートマットを召喚ー！ターンエンディング！」

設楽譲 LP 80000

手札 5 枚

「俺のターンー！俺は、マジドリーモンを召喚ー！魔法カード、墮落ーこれにより、キラートマットのコントロールを得るーキラートマットで攻撃ー！」

設楽譲 LP 66000

「だが、この瞬間、トライガーディアを特殊召喚ー！トライガーディア

の攻守は手札の枚数の600倍だあ！…」

設楽譲二

手札4枚

トラゴエディア ATK2400

「ちつ、ならバトルフェイズは終了。俺は、キラートマト、マッドデーモンの二体をオーバーレイ！ エクシーズ召喚！…インヴェルズ・ローチ！」

インヴェルズ・ローチ ATK1900

「出た！ 銀次さんのエクシーズコンボだ！」

お前はどこ取り巻きだ、奏太。

「俺はカード一枚伏せターンエンド！」

四条銀次 LP 8000

手札2枚

「エクシーズ召喚？ それ『朗さんのカード』じゃ…」

「掃除回避の為、ちょっと拝借してきました。」

「うおい！… とりあえず、俺のターン！ 俺はカードをセット！ 『大ネズミ』を召喚！… カードを伏せ、ターンエンド！」

設楽譲二 LP 6600

手札2枚

「なにをするつもりだ？俺のターン！バトル・イン・ヴェルズ・ローチで巨大ネズミに攻撃！」

「罠発動！スピリットバリア！モンスターがいるかぎり、俺は戦闘ダメージを受けない！そして、巨大ネズミの効果で再び巨大ネズミを召喚！」

「なんだそのデッキ…俺はモンスターをセット、ターンエンド。」

「今に分かるさ。俺のターン！UFOタートルを召喚！巨大ネズミでローチに攻撃！効果で巨大ネズミ！もつかい攻撃！効果で素早いモモンガ！（以下略）カードを一枚伏せて、ターンエンド！」

さて、一回状況を整理してみるか。

設楽譲二 LP7600

手札0枚

場 軍隊竜、素早いモモンガ（裏）×2、トラゴコエディア

魔法・罠 スピリットバリア 伏せ ×2

除外 0枚

墓地 9枚

…かなり厄介な状況だな。しかし、相手のデッキのコンセプトが良く分からんな。

「俺のターン、ドロー！（俺の一枚の伏せはヘイト・バスターと終焉の焔。相手の目的が分からん以上、うかつには使えんか…）俺は、ジャイアント・オーラを召喚。ジャイアント・オーラで軍隊竜を攻撃、手札から速攻魔法サイクロン発動。スピリットバリアを破壊！」

「それにヒューンしてスピリットバリア！軍隊竜は破壊されるが、ダメージは〇だぜ！」

「一枚目か…ローチでトラガニアを攻撃。ターンエンド。」

四条銀次 LP 8000

手札1枚

「俺のターン！一体のモモンガを反転召喚！一体でローチを攻撃！モモンガの効果で合計2000回復！」

設楽譲 LP 9600

「モンスターをセット、ターンエンド！」「エンドフェイズに終焉の焰発動！黒焰トーケンを一体特殊召喚！」

黒焰トーケン ATK 0

設楽譲 LP 9600

手札0枚

「俺のターン、ドロー！黒焰トーケン一体をリリース、ヘル・エンプレス・デーモンをアドバンス召喚！」

ヘル・エンプレス・デーモン ATK 2900

「ヘル・エンプレス・デーモンでセットモンスターを攻撃！女帝の一括！」

「セットモンスターは魔道雑貨商人。効果発動！」

「！」こつぱデッキの上からモンスターカード以外のカードが出るまで、何枚でもドローし墓地に捨てるカード。そして魔法・罠が来た時、手札に加えることができる…！」

いや、なんで奏太が解説してんだよ。そのセリフじゃ、俺が蟲野郎みたいじゃないか。（ローチいるけどさ。）後、できるじゃなくて強制効果な。

「さあ、いぐぜ！ まず一枚目…！」

譲二もノリノリだな。

「ドロー！ ジャイアントウイルス、グリズリーマザー、ライコウ、メタモルポッド、キラートマト、シャインエンジェル、コーリング・ノヴァ、ジャイアントウイルス、ジャイアントウイルス、カオスボツド、コーリングノヴァ、大王目玉、グリズリーマザー、冥府の使者、ゴーズ、シャインエンジェル、大王目玉、キラートマト、悪魔の偵察者、千年の盾、マシュマロン、…残骸爆破か。かなり引いたな。」

リクル特攻+残骸爆破か！ しかし、なんて運してるんだ。普通他のサポートカードを引いてしまうもんだが。とりあえずあいつの墓地は…？

墓地 36

もう発動圏内か…

「俺は、ターンエンド。」

四条銀次 LP 8000

手札1枚

「ふふふ、俺のターン！俺はカードを一枚伏せ、ターンエンド！」

設楽譲一 LP 9600

手札0枚

「くつ……俺のターン！俺は、「その瞬間に罷カード、残骸爆破2枚発動！合計で6000ダメージだ！」マジかよ！」

四条銀次 LP 2000

「俺はジャイアントオーケーを攻撃表示に変更。ヘル・エンプレス、ローチ、オーケーで攻撃！」

設楽譲一 LP 2600

「くつ……だが、次におれが残骸爆破を引けば俺の勝ちだ！」

「こいつの強運だと、マジで引きそうで怖い。

「俺は、一枚のカードを伏せ、ターンエンド。」

四条銀次 LP 2000

手札0枚

「俺のターン、ドロー！俺は貪欲な壺を発動！墓地から巨大ネズ

「三体、軍隊竜一體を『テツキに戻し、一枚ドロー！』

設楽譲二

手札2枚

引いた瞬間、譲二の口角が釣りあがる。

「俺はカードを一枚伏せ、ターンエンド！」

「俺のターン！」

「罷発動！残骸爆破！」

「くつ…カウンター罷、魔宮の賄賂！」

「なんだって！？」これじゃ俺の…なんてな。カウンター罷、カウンター カウンター！カウンター罷の発動を無効にする…俺の勝ちだ！！」

「…それはどうかな？カウンター罷、神の宣告！ライフを半分払い、お前のカウンター カウンターを無効にする！よつて魔宮の賄賂は成立、残骸爆破は無効だ。行くぞ、ヘル・エンプレス・デーモンでダイレクトアタック！女帝の一括！…」

設楽譲二 LP0

「ちくしょー、俺の負けか。」

「いや、かなり危なかつた。で、約束だ。俺らの事務所を掃除して

「もうおつかあ！」

「おい、銀次。」

「後ろから、声がする。まさか…

「し、仁朗さん…。」

「お前、俺のカード勝手に使つてんじゃねええ！」

「痛い痛い！ 関節がイカれるうううー。」

その後、結局俺達は大掃除より辛い日に会つた。

「…つて感じだ。」

「あの時の銀さんの焦りよう…アハ」

「でも、今も付き合いのある友人がいるつて言つのは、素敵ですね！」

「ああ、そうかもな。よし。久しぶりに呼んでみる『おじやましまーす！』つては？」

「ちょっと遊びに来たぜーほれ、年越し蕎麦の材料ー。」

「ほれつて…俺が作る前提かよーー！」

「硬い」とやうなよ、銀さん。」

「お前が言つたな！！」

「ふふふ。」

いつもにまして騒がしい年末。いつか仁朗さんも 連れ戻せたら…。

おまけ：初詣

銀「俺は小吉。…えっと、誰かに振り回される？はあ…」「…」
か「私は中吉でした。」 謙「俺は大吉だぜ…」 奏ちゃんはどうした？

奏「凶…自重しろ？おーおい、僕はいつも物静かに…あつーお土産屋に萌えキャラが…！」
（（（早速自重してない…）））

正月記念回 新年前夜／探偵の掃除（後書き）

特別偏 どうでしたか？

主人公の過去は暗い所が多い予定なので、明るい所を書いてみました。

感想お待ちしております！

第6話 疑心と邂逅（前書き）

今回の「テューハル」は、
二段構成にしてみました。
物語が動き出します。

第6話 疑心と邂逅

side・奏太

え～っと…

なにこの気まずい状況？

「……」

「……」

僕が起きて朝食を食べに机に向かうと、かなめちゃんと銀さんが無言で朝食を食べていた。そもそもの始まりは、昨日銀さんが興野凪を「。持ちだと言った事だ。友達の兄を信じたいかなめちゃんは珍しく真っ向から反対した。

仕方ない、僕が話題を作るか！

「あ、これ、いい米だ…ね。」

「昨日と変わらねえよ。」

なんで米！？僕は馬鹿か！ネタの神よ僕に力を…！…なんて考えると、突然電話が鳴り出した。

「はい。もしもし。…　はい、わかりました…！」
かなめちゃんが応答する。電話との速いなあ。

「なんの電話だったの？」

「凪さんが、私の入学試験の為のデッキ調整に付き合ってくれるつ

て！」

「ああ、眩しい笑顔だ。もうノ。とにかくいいじゃない。だつてかなめちゃん、とても幸せそつ…

「銀次さん、私、あなたが何て言つても行きますからー。」

「おひ、行つてこい。ただし、泣くんじやねえぞ。」

「売り言葉に買い言葉、つて言つんだっけ？かなめちゃんは少し怒りながら支度して出ていった。」

「銀さん、いくら何でもおとなげ無いよー！いくら何でも女の子を危険な所に向かわせるなんてー！」

「なに言つてんだ。俺はそんなガキみたいな事しない。かなめを今から尾行する。凡に何か不審な動きがあつたら俺達が出てデュエルすればいい。いわゆる囮捜査だ。」

なるほど、それならかなめちゃんの誤解も解けるし、相手も簡単にノ。を出すかも知れない。

「さすが銀さん！僕に思い付かない事を平然とやつてのけるうー！そこにはシビれる、憧れるうーー！」

「馬鹿言つてないでむつむつこへん。」

それから僕達は変装しながらかなめちゃんを追つた。しかし、この変装グッズ、銀さんの趣味かな？

銀さんはシルクハットと杖に、黒いコート。僕は水色のハンチング帽とカーディガン。

まるでどこの英國紳士みたいだ。ああ、周りの目が痛い！

s.i.d.e・ツヴァイ

たつた今、私は偉大な使命の為障害となる一人を観察している所だが…。なんだれば？あの一人の衣装、こすぶれ、という奴か？妙な服を着ている。

「おい奏太、かなめが興野凪と路地裏に移動している！」

「待つて銀さん！」の服もうやだよ…悪目立ちしてると…」

「それどこひるじゃあない！急ぐぞ…！」

雑賀仁朗の息子…私は分かるぞ。その気持ち…つてそんな場合じゃなかつた…！」

「待て！彼の邪魔をさせる訳には行かない！」

私は一人の前に立ちふさがつた。

side：銀次
俺達がかなめを追おうとした瞬間、

「待て！彼の邪魔をさせる訳には行かない！」

と、凜とした声が聞こえた。振り返ると、そこにはスースを着た女性が立っていた。

「……お前は？」

「私はツヴァイと呼ばれる者。訳あって貴様達を通す訳にはいかん！決闘だ！」

妙に古風な喋り方だ。

「断る。デュエルをして、なんの得がある？」

「ほお、言つじゃないか。四条家の失敗作が。」

「……お前、何を知つてゐる？」

誰にも、仁朗さんにさえ俺の家の事は話していない。何故四条家の計画を知つてゐる？

「さあな。それが知りたければ、私との決闘を受ける！」

「ちつ……奏太、先に行け！」

「おつと、通さんと言つてゐるだらう？」

「わかつた、デュエルを受けよう。」

「「「デュエル！！」」

s.i.d.e・かなめ

全く、銀次さんの言つ事は信じられません。

Ｚｏ・のカードを持つてゐるなら、私の元養父、成金金造のよつて自らの欲望をコントロールできない状況に陥るはずです！

でも凪さんは、今日も私のデッキ調整に付き合つて下さると…
そして何より真子さんのあの笑顔が凪さんが優しい人であると物語
っています。

「じゃあ、始めようか。」

「はい…」

ここは、人通りの無い路地裏。あまり人の迷惑にならない様にと凪
さんがここにしました。

「「デュエル！」」

緋色かなめ LP 8000

興野凪 LP 8000

「先行は譲るよ。」

「はい！私のターン！私はモンスターをセット、カードを一枚伏せ
てターンエンドです！」

緋色かなめ LP 8000

手札4枚

「僕のターン、ドロー！僕は、イエロー・ガジェットを召喚！」

イエロー・ガジェット ATK 1200

「効果で、デッキからグリーン・ガジェットを手札に加える。バトル
！イエロー・ガジェットでセットモンスターに攻撃！」

「罠カード、くず鉄のかかし！相手モンスターの攻撃を一度だけ無効にして、再セットします！」

「なるほど、カードを一枚伏せ、僕はターンエンド。」

興野凪 L.P 8000

手札4枚

「私のターン！チューナーモンスター、トップランナーを召喚します！」

トップランナー ATK1100

「さりに、チューニングサポートーを反転召喚です！チューニングサポートーは、シンクロ素材とする時、レベル2として扱えます。レベル2のチューニングサポートーにレベル4のトップランナーをチューニング！集いし星が、思いを繋げる鎮となる！シンクロ召喚！！！C・ドラゴン！」

C・ドラゴン ATK2500

「チューニングサポートーの効果で一枚ドロー！」

緋色かなめ

手札5枚

「バトル！C・ドラゴンでイエローガジェットを攻撃！」

「罠発動、デモンズ・チューン！」れでC・ドラゴンは攻撃と効果を封じられる。」

「そんな……私は、カードを伏せてターンエンドです……。」
「いやあ、緋色さんはすごい才能の持ち主だ……とても昨日始めたとは思えない！」

「本当にですか！？ ありがとうございます！」

「その才能が………… 姉ましい。」

「えつ？」

「…………何でもないよ。僕のターン。グリーンガジェットを呪喚。効果でレッドガジェットを手札に。更に血の代償を発動。ＬＰを500払ってレッドガジェット。効果でイエローガジェットを手札に。」

興野凪 ＬＰ 7500

「更に500払ってイエローガジェットを召喚。効果でグリーンガジェットを手札に……イエローとレッドでオーバーレイ。ジエムナイト・パール。」

興野凪 ＬＰ 70000

ジエムナイト・パール ＡＴＫ 2600

凪さんが鬼気迫る勢いで展開しています。何かを振り払つよつこ……

「バトル、ジエムナイト・パールで……ドラゴンを攻撃。」

「罠発動、くず鉄のかかしです！」

「グリーンガジェットで……ドラゴンを攻撃。速攻魔法、リミッタ

「解除！機械族の攻撃力は一倍になる…」

しまった！そちらが狙いでしたか！

グリーンガジェット ATK2800

「う…」

緋色かなめ LP7700

「続いてイエロー・ガジェットで攻撃！」

「させません！黒カード、トゥルース・リイン・フォース・デッキ
からマッシュ・ウォリアーを特殊召喚します！マッシュ・ウォリアー
は一ターンに一度、戦闘で破壊されずダメージを受けません！」

確かにミッター解除はエンドフェイズに機械族を全て破壊する効果
があるはず…。

「まだだ。グリーン、イエローでオーバーレイ！希望の皇よ、矛と
なり盾となれ！エクシーズ召喚！！N.O.・39希望皇ホープ！」

N.O.・39 希望皇ホープ ATK2500

「嘘…なんで…？」

「君には悪いけど、俺の、俺の妹の為に犠牲になつてもうう…カード
一枚伏せ、ターンエンド！」

興野凪 LP7000

手札4枚

私は、凪さんの変貌に驚愕する」としか出来ませんでした。

s.i.d.e.銀次

「な……なんでそのカードを……」

田の前で起きていることが信じられない。何故、こいつがあのカードを……

「ふん、やはり失敗作か。つまらんな。この程度の紛い物にしてやられるとはな。」

俺のフイールドは突然出てきたあの怪物に蹂躪されていた。

「そんなことはどうでもいい！何故お前が四条家の計画の集大成の一枚を持っている！」

俺はツヴァイのモンスターを指差し怒鳴る。

暴力的だが、どこか神々しい、天空を司る深紅の神

オシリスの天空竜を

第6話 疑心と邂逅（後書き）

いかがだったでしょうか？

オシリスOCG化が嬉しくてつい出してしまいました。

次回、主人公の過去が明らかに…？

第7話 光さす道（前書き）

今回の「テュエルは、ストーリーの都合上、途中経過を省いたものがあります。

後、私の文才が欠如しているため、熱い展開になつておりません。
脳内BGMをかけて読んでもらえると、幸いです。
ちなみに、私は遊星のテーマ（勝ちフラグのやつ）をイメージしております。

第7話 光さす道

side：銀次

「なぜ、この程度が出来ない。」

自分に冷たく問う父さん。 僕の身体が所々悲鳴をあげている。

「所長、四条銀次は心身共に限界です。やはり、改造を施したとは
いえ、生身の人間が神を扱うのは……」

父さんの横で女人人が話しかけている。

「だが、これには多少の特別に耐性を持たせる事が出来た。」

父さんは僕をもの扱いした。僕つて……

「ですが、その特別を使用するたび、副作用が身体に生じてあります。」

そう言って、女人人は僕の変色した片目を指さす。

「……わかった。これを捨てておきなさい。」

僕は知らない場所に連れていかれた。

それから、俺は仁朗さんと出会つた

神、オシリスの天空竜を見て、昔を思い出す。

「どうした、やはりこの程度か…私はターンエンド…」

ツヴァイ LP 1500

手札4枚

「…いや、昔を思い出してな。俺のターン！神とは言え、そいつは所詮模造品だ！俺はそいつを乗り越える！」

過去を、乗り越える為に。

「俺は、クリボー、暗黒界の軍神シルバ、冥界の魔王ハ・デスを除外！ダーク・ネクロフィアを特殊召喚…！」

「だが、オシリスの効果発動！雷電弾！」

ダーク・ネクロフィア ATK200

「罠発動！暗黒の謀略！お互に手札一枚を捨て一枚ドロー！だが、お前は手札を一枚捨てる事で無効にできる…たあ、どうある？」

「（奴はまだ召喚権を残している…。もし3000を超える手段が奴の手札にあれば、オシリスは破壊される…）良いだろ？、その効果を使うが良い！」

「わかった。では一枚捨てて一枚ドロー…」

ツヴァイ4枚

四条銀次3枚

「……更に、手札抹殺を発動！」

「何！？」

「俺は一枚捨て一枚ドロー。お前は四枚捨てて四枚ドローしろ！」

「くつ…貴様何を…！」

「そして、手札から捨てられた暗黒界の術師スノウの効果で、デッキから暗黒の門を手札に加え、発動！ 悪魔族の攻守は300上がる！」

ダーク・ネクロフィア ATK500

「装備魔法、レインボー・ヴュール！」これで、ネクロフィアビートルを行うモンスターの効果は無効になる！

「つまり、オシリスの攻撃力は…！」

「0だ！ いけ、ネクロフィア！ 念眼殺！」

「馬鹿な！ 我が神が…！」
ツヴァイ LP500

「俺は、ターン、エンド。」

四条銀次 LP200

手札0枚

神は倒せた。しかし、手札は0。ライフも残り僅か。対してあいつはフィールドはがら空きだが、手札は四枚もある。

「神を倒したはいいが、ここまでのようなだな。私の おや、緊急命令か。時間も稼げたようだし…命拾いしたな、失敗作！」

ツヴァイは憎々しげに俺に言い、去っていった。確かに、命拾いした。俺はただ神のを倒し、憂さ晴らししただけだ。これでは、過去を乗り越えられなかつた。

「銀さん！」

「ああ、奏太、急いでかなめの所へ…行つてくれ…。俺も少ししたら…行く。」

我ながら弱々しく呟いた。しかし、奏太は察してくれたのか、かなめの所へ走り出した。

奏太を見届けた後、俺の意識は薄れていつた。
side:凧

「カードを伏せ、俺はターンエンド！」

一つ、重大なミスをした。あのバトルフェイズ、マッシュブ・ウォリアーは破壊出来たはず。何故しなかつたのか？罪悪感？下らない。ただのミスだ。

興野凧 L P 7 0 0 0

手札4枚

「…わ、私のターン。私はモンスターをセット。ターンエンド…です。」

緋色かなめ L P 7 7 0 0

手札4枚

彼女は意氣消沈している。可哀想だが、俺や真子の為にも犠牲になつてもいい!」

「…………どうして、どうして。なんてカードを……」

突然彼女は叫んだ。

「簡単なことさ。プロなんて聞こえはいいけど実際は勝てないとゴミ……。僕はそのゴミだった。俺達はいわゆる孤児でね。このままで妹、真子の生活もままならなくなつてしまつ。そんな悩みを抱えていると、このカードがデッキに入っていた、それだけさ。」

彼女から同情の色が見える。

「君みたいな才能の持ち主には、分からぬさ。僕のターン! 養力ード、サンダー・ブレイク。手札を捨て、君のマッシュブ・ウォリアーを破壊。バトル! ホープでセットへ攻撃! ホープ剣・スラッシュ。」

「シールドウイングの効果! 戦闘で一度破壊されません!」

「へえ? 危介だな。僕は血の代償の効果、500払つてグリーンガジェットを召喚。効果でレッドガジェットを手札へ。そのままグリーンガジェットで攻撃! 更に血の代償でレッドガジェット! 効果でイエローガジェットを手札に!」

「く、くず鉄のかかし!」

「知つているよ。レッドガジェットでシールドウイングを攻撃! 更にジェムナイト・パールで攻撃!」

「ぐう……」

興野凪 L P 6000

緋色かなめ L P 5100

「伏せはブラフかい？カードを伏せてターンエンド。」

興野凪 L P 6000

手札2枚

「まだ、まだ諦めません！私のターン！私はチューナーモンスター、ジャンクシンクロンを召喚！効果でチューニングサポートーを蘇生！更に一重召喚発動！私はもう一度召喚が出来ます！スピードウォリアーを召喚！レベル1のチューニングサポートーと、レベル2のスピードウォリアーとレベル2のシールドウイングに、レベル3のジャンクシンクロンをチューニング！集いし星が、思い煌めく星となる！光さす道となれ！シンクロ召喚！スターダスト・ドラゴン！」

スターダスト・ドラゴン ATK 2500

「スターダスト・ドラゴンでレッドガジェットを攻撃！響いて、シユーティング・ソニック！」

星屑の竜が、レッドガジェットを攻撃する。

「ホープの効果、発動！オーバーレイ・ユニットを一つ使い、モンスターの攻撃を無効にする！ムーン・バリアー！」

「そんな！私は装備魔法、ファイティング・スピリッツを発動します！この効果でスターダストは相手モンスター一体につき300アーツブします！」

スターダスト・ドラゴン ATK3700

「私は、ターンエンド！」「罠カード、砂塵の大嵐！くず鉄のかかしを破壊！」「ええ！」

緋色かなめ LP5100

手札1枚

「俺のターン！僕は魔法カード、ライトニングボルテックスを発動。僕は手札を一枚捨てて、スターダストを破壊！」

興野凪

手札1枚

「スターダスト・ドラゴンの効果、リリースする事で破壊効果を無効にします！ヴィクトイム・サンクチュアリ！」

「だが、ホープで攻撃！ホープ剣スラッシュ！」

「手札から、速攻のかかしの効果発動！手札から墓地に捨てて、バトルフェイズを終了します！」

「ちつ、俺はターンエンド。」「このハンドフェイズ、スターダスト・ドラゴンはフィールドに帰ってきます！」

興野凪 LP6000

手札1枚

「もういい加減諦めなよ。君の手札はたつた一枚。俺のライフは6000もある。何故諦めない？」

「私は、諦めません！光さす道は、偽りの希望になんか屈しない！私のターン！」

「彼女が力強くドローする。何故、絶望しない？No.の力が機能しないから？」いや

「…来た！私は罠カード、エンジエルリフトを発動します！墓地から、チューニングサポートーを特殊召喚！更に、チューナーモンスター、ターボシンクロロンを召喚！レベル1のチューニングサポートーとレベル1のターボシンクロロンをチューニング！集いし光が、新たな地平へと誘う！シンクロ召喚！光の架け橋、シンクロチューナー、フォーミュラ・シンクロロン！」

フォーミュラ・シンクロロンDEF1500

「フォーミュラ・シンクロロンとチューニングサポートーの効果で、一枚ドローします！」

緋色かなめ

手札2枚

「まだです！レベル8のスターダスト・ドラゴンとレベル2のフォーミュラ・シンクロロンをチューニング！集いし思ひが、新たな境地を呼び起こす！アクセルシンクロ…！」

光の輪に包まれたスターダストが消える。

「消えた？」

「 生来せよ！シュー・ティイ・ング・スター・ドラゴン！」

シュー・ティイ・ング・スター・ドラゴン ATK3300

流れ星のような、美しい輝きを放つ竜が現れた。

side・真子

「 多分、この辺だと思つ！」

かなめの保護者、らしい女の人に言う。私が家でのんびりしていると、突然彼女から電話がかかって来た。兄貴がかなめを連れてどこかに行つた。場所に心当たりはないか、と。あたしは兄貴が一人で物思いにふける時よく行くという路地裏の広場が思い浮かんだ。

「 あつ、いた！」

兄貴がかなめとデュエルをしている。

「 ああ、遅かつたか。」

女の人はうなだれる。何でも、自分が代わりに兄貴とデュエルをするつもりだつたらしい。しかし、兄貴の様子がおかしいような…

「 シュー・ティイ・ング・スター・ドラゴンの効果！デッキの上から5枚カードを引いて、チューナーモンスターの数だけ攻撃する事が出来ます！」

「 はつ！そんな運任せが通用するか！一枚も引けなかつたら君の敗けだ！」

兄貴…どうしちまつたんだよ…。

「私は…敗けられない！真子さんの為にも、あなたを救います！一枚目、ボルト・ヘッジホッグ！一枚目、奇跡の軌跡！三枚目、ジャンクシンクロン！四枚目、スターダスト・シャオロン！」

「だが、一度の攻撃ならホールドで防げる！次に引いたカードがチューナーとしても、ライフは残る！どうあがいても君には絶望の未来だけなんだよー！」

確かに、このままだと兄貴にターンが渡る。兄貴はプロだ。このチャンスを逃すと、次は無い。

「ドロー、チューナーモンスター、ゾンビキャリアー・バトル、シュー・ティング・スター・ドラゴンで、ホールドに攻撃！！スターダスト・ミラージュ！」

「聞いてなかつたのか！ホールド、ムーン・バリア！」

NO.39 希望皇ホールドORU1 0

「まだです！まだ絶望はしません！速攻魔法、ダブル・アップ・チャンス！攻撃を無効にされた場合、攻撃力を一倍し、もう一度バトルを行えます…！」

「な、何イツ！」

シユーティング・スター・ドラゴン ATK6600

「シュー・ティング・スター・ドラゴンでレッドガジェットに攻撃!
!スター・ダスト・ミラージュ第一打!」

「ぐう！」

興野凪 LPO 800

「これで最後、ジムナイト・パールに攻撃!! シューティング・スター・ダスト・ミラージュ第一打!」

「ぐああああ！」

興野凪 LPO

デュエルが終了し、あたしは兄貴の所へ駆け出した。

side:かなめ

デュエルが終わり、私は座りこんでしました。

「まさか、プロに勝つなんて、す」「ふよー！」

奏太さんが駆けつけてきました。

「いえ、凪さんは所々ミスをしていました。あれがなければ…。」

「それって…」

「N.O.・に、抗つたのかも知れません。」

side: 凪

僕は、弱い。N.O.・に負けただけでなく、妹の友人にてをかけるなんて……。

「兄貴、大丈夫! ?」

真子が駆けつけてきた。

「真子……。僕は最低な兄だ。お前の友達に、手をかけようとした。」

「そんな事ありません。」

と、言ったのはさつきまで戦っていた少女、緋色かなめ。

「凪さんは、N.O.・に抗つてミスをするよう仕向けていました。それは、心の底で欲望に抗つたからではないでしょうか?」

彼女は、暖かい言葉を紡いでいく。

「一度犯した間違いは、次に繋げばいいんです。これからは、本当の希望を見失わないで下さい。」

そう言う彼女の笑顔は、一点の汚れもなかつた。

まず、事件の顛末から。驚くことに、かなめが興野凪を倒したらしい。

かなめが使つたと言う、未知の呪喚方法アクセルシンクロ。事件解決後、デッキを調べたが、シュー・ティング・スター・ドラゴンなるカードは存在しなかつた。とすると、そのカードもN.O.・同様、特別という訳か…。

事件の張本人である興野凪だが、無事会心し、あのデュエルで何か感じる事があつたのか、今ではプロの中でも中堅クラスの実力者だ。次に、ツヴァイと名乗る女。奴は奏太の情報網を用いても手掛かりすら掴めない。オシリス、四条家の計画を知つてゐる等疑問は尽きないが、

とりあえず…

「ええつ！？女じゃないの！？」

「僕は男だ！…」

「二人共、落ち着いて下さい！」

あの事件以来、よく遊びに来るようになつた興野真子。かなめと仲良くなつたはいいが、奏太を女と間違え、ムキになつた奏太と喧嘩している。

「ええい、このわからず屋め！」

「なにさ…！」

「お前等、 静かに…」

注意しようとしたところを一人が振り上げようとした拳が俺の顎に当たる。

「お前等… 出ていけえ…！」

この事務所は当分静かになりそうにない。

第7話 光さす道（後書き）

今回は主人公の過去の一場面、かなめの成長とフラグを描写しました。駆け足になってしまったので、補足。

凧のデッキは、【代償ガジェ】。この小説では珍しいガチです。

シユーティング・スター・ドリーピングは、当分出す予定はないです。今回はこれから伏線として出しました。

ツヴァイの行動は、次回書く予定です。感想、指摘お願いします！

第8話 とあるバカの憂鬱（前書き）

口説回。 1月から少しの間テュエル無しの予定です。

第8話 とあるバカの憂鬱

とある場所

「成る程、四条銀次は神を倒した、と。」

「どこか冷徹さを感じる声に、シヴァアイは続ける。

「はい。しかし、そこまででした。その時点で奴は万策尽き、私の勝ち同然でした。」

「せうか、じ苦労。暫く休むと良い。」

「では、せうせう…」「アインス、腹減つタ。」トライ、今は会議中だぞ…」

喧嘩する一人。アインスと呼ばれた白髪の青年は「二人共落ち着け。」

と、トライといつ、ボサボサの髪の少年とシヴァアイといつ、長髪の女性を諫める。

「とりあえず正面の目的は、ゾー・を利用して、負のエネルギーを增幅していくことだ。トライ、お前はとりあえずゾー・持ちの決闘者を見つけ次第デュエルを行ってくれ。」

「へッ? ゾー・持ちかラstiいとるンですか?」

「いや、シヴァアイの報告では、デュエル中に負の感情が色濃くでた

ケースがあつたらしい。勝つてもノ。・を奪う必要は無い。ただ、絶望に叩き落として欲しい。」

「了オ一解。要は、いたぶればイインだね?」

少年、トライは赤く濁つた目を嬉しそうに細め、外へ出ていった。

side: 奏太

長期休暇が終わり、かなめちゃんが中等部に入学し、僕は高等部一年生となつた。

「うつす、奏太。」

陽気に声をかけてきたのは、我が悪友、氷室^{ひむろ}タ^{ゅう}だ。

「おう、おはよう。休み明けって、なんなのかねえ?」「知らん。ところで、お前宿題やつたのか?」

「ふあさあか!」

「だらうな。」

「相変わらず、夕は無表情だねえ。」

彼は日頃無表情でなに考えてんのか分からぬけど、整つた顔つきかつ運動神経抜群で中々女性人気が高い。唯一僕を男だと知つて驚かなかつた事も有名だ。

「いや、これでも結構驚いたけど。」

「マジで！…ってか、心読んだ！…？」

なんて談笑していると、

「奏太ー！…俺だ、結婚してくれー！…」

と、女子が突っ走ってきた。

「うわあああ！間に合ってます！」

彼女の名前は東雲葵

じのの あおい

何の儀式なのか、毎回僕に向かって突っ込んでくる。

「毎回思つんだけど、なんの儀式？これ。」

「愛の儀式…かな？」

「まるで意味が分からんぞー！」

ちなみに、こんなんだけど成績はトップクラス。 つぐづぐ世の中
つて理不尽だと想つ。

「あ、皆おはよー。」

「良かつた。君だけが普通の常識人だ！」

「普通つて言つくなー。」

今の僕の心を癒す彼女は 十人 成実 とことん普通の女子生徒だ。
常識人の僕にとつて、正にオアシス……！

「なに考えてんのか知らんが、お前も充分変人だからな。」

「夕君、何を失礼な。僕は至つて普通の男子高校生さー！」

「そこに書いてあるのは？」

ハツ！何故僕は人とバイクがドツキングしている絵を……？

「ひどい！こんなものより私を見て！」

「待つて！僕の究極最終進化形態を消さないで……折角上手く書けたのに……！」

「やつぱり、十人が一番普通だな。」

「普通って言うなー！」

……この時、僕は久しぶりにツツ「ゴミ不在の恐怖を味わつた……！

s.i.d.e・かなめ

入学試験も合格し、いよいよ入学式です！緊張するな……。

「オッス、かなめーー！」

「あつー真子さん、おはよーいぞーいますー！」

あの事件の後、真子さんもデュエルアカデミアに入学する事が分かりました。真子さんは最後まで秘密にしたかったと、照れながら言つていました。暫く一人で話していると、

『新入生は、入学式が始まりますので、体育館へ行って下さい。』

と、放送があつたので、一人で体育館に急ぎました。何気ないけど、幸せだなあ……。

s i d e : 奏太

未だかつて、こんなカオスな事があつたるうか……

「また……四人同じクラス……だと……！」

「わー、本当だあ！」

「奏太とまた同じ……ふふふ……」

「こんな事もあるんだな。」

上から僕、成実、葵、夕だ。

「こんなの絶対おかしいよ！』

「おかしくないわ。必然よ！」

葵が何故か熱く熱弁する。

「なんですかー！」

「私とあなたの……運命だからよー！」

「駄目だコイツ……早くなんとかしないと……！」

「それより、はやく教室に行かない？新しい教室つてワクワクする

！」

「……普通だねえ」「だから、普通って言つたなー……」

いや、普通にこそ君の美点の一つなんだよ……。なんか、すいこ癒される。

だが、この癒しも、一瞬にして崩される」ととなる。

「俺は担任の古田康夫だ！宜しくなーー！」

……まさかの熱血系生徒指導、古田教諭が担任であった。

なんだと……！

「おー、雑賀じゃないかー！宜しくなーー！」

と、教諭は僕の背中をバシバシ叩く。

「……ドマイ！」

三人が僕にそう告げる。嗚呼、憂鬱だ……。

「じゃ、さよなら～」

「おう、また明日。」

僕と夕は別帰路なので別れる。成実は部活、葵は委員会らしい。クラスの皆、僕が男だって事に驚いてたなあ。ま、去年もだつたけど。しかし、古田教諭か…。悪い人じやないけど、なんというか、やたら僕に目をかけてくるんだよねあの補習の恨みは忘れん…

なんて冗談半分で考えていると、僕と同じくらいの年の、赤い目の男の子が何か困っていた。

「どうかしました？」

「いやア、こノ飲み物が飲みたいンすけど…」
と、自販機を指さす。

変わったイントネーションだなあ。外国生まれとかかな？

「ああ、これなら、ここにお金を入れて…」

自販機からジュースを買い、男の子に渡す。

「すンません！」

「いいよ。君、外国人？日本語上手いなあ。」

「アー、そうッス。ちょっと上司にお使いたノまれて…。一人共変わり者でネ。」

「分かる、分かるよー！君の苦労ー！僕は普通の学生だけど、立場が上の人間にに対する苦労！」

「分かつてくれるツスカ！心の友よーー！」

「つむーー！」

何故か意氣投合した、外国人の男の子。それから僕たちは愚痴を言い合つた。

「いやあ、氣が合うね。僕は雑賀奏太。君は？」
「トライツス。ん？ 雜賀つて…。」

「なんだい？」

「いや、忘れたツス。」
「なんだそりや！！」

それから、僕たちはまた夜遅くまで語り合つた。

第8話 とあるバカの憂鬱（後書き）

今回は、主に奏太の日常です。

次回は、今回出番のなかつた主人公、銀次の日常メインで進めて行こうと思います。

感想、評価待ってます！！

第9話 探偵の決意（前書き）

予告通り、今日は主人公、銀次の日常回です。

前回と違つて、シリアル（笑）となっています。

第9話 探偵の決意

side：銀次

「四条家の詳細について教える？」

奏太達を見送り、俺は警察の所に行つた。四条に何があつたのかを知るために。

「いや、先輩には世話になりましたけど、これは極秘事項だからなあ。」

「こいつは伊勢 哲也（いせ てつや）。俺と同じ仁朗さんに拾われた奴で、警察をやつている。俺が探偵業をする上で、警察との連携を取れるのはこいつのおかげだ。」

「……オシリスの天空竜を使う者を見た、と言つたら？」

オシリスの天空竜

オベリスクの巨神兵

ラーの翼神竜

この三幻神を使いこなす事が四条家の最終目的だったのは、俺が一番知つている。ならばその目的が行き着く先は何か？それを知れば、ツヴァイの手掛けりが掴めるかも知れない。

「！？… 本當ですか！？」

やはり、神の名に反応した。こいつは何か知つている。

「ああ、しかも俺は実際に戦つた。負けたがな。」

…状況的も、精神的にも。

「…よく無事でしたね。しかし、いくら先輩と言えど、民間人に首を突っ込ませる訳には…。」

「俺は、名字の通り元々四条の人間だ。モルモットで、捨てられたがな。」

俺はN。のカードを手に取り、灰色となつた片目を見せる。

「先輩…田が…！」

「あいつらの実験のおかげで、多少の異常には耐性が出来ていて。このN。も異常の一つだ。あの成金も、こいつに取り憑かれていた。」

「…信じますよ。着いてきて下さい。」

哲也は、俺を資料室まで案内してくれた。

「…結論から言つと、四条家は滅んでいます。」

「滅んだ？」

「俺も、あの時は偶々近所のパトロールをしていただけで、事件を担当していた上司に聞いた話ですが…連中は神の力を束ねて、創造神を召喚するつもりだったそうです。」

「創造神？N。なんて異常なもの持つてる俺が言うことじやあな

「先輩は、知りませんか？神の怒りに触れた人間の末路を。あの事

件から、警察も神の存在を信じるようになりました。」

確かに、もう何十年も前、ある犯罪グループが神の複製をつくり、精神の異常、最悪死亡したと言つ話だったか…。

「三幻神の内一体だけでもあそこまでの影響が生じました。そんなのが三体集まれば…」

そこで、一息おき、

「…世界が、滅ぶでしょう。」

「ま、待て！神の怒りとやらはおそらく事実だ。俺も奴らの実験で経験済みだしな。だが、神を持っていた奴はまがい物と呼んでいた！四条家の神も奴等が複製したコピーじゃあないのか！？」

「確かに、オリジナルの神は、初代決闘王者が墓守の一族の元に封印したと伝えられています。今現在も彼らによつて守護されているでしょう。」

「ならば、あいつ達も神の怒りを買つているはずだ！何故俺の見た奴は平気だった？」

「俺は見てないんでもなんとも言えませんが…もし、そいつらがコピーの神を操る術を知つていて、コピーから『なにか』を創るつもりだとすれば？実際、過去に神を縛るカードを用いて無理矢理操つた例もあります。先輩が言つ奴等は、四条家から神のカードを奪い取り、四条家の計画を継いでいる可能性があります。」

不意に、寒気に襲われた。オシリス一体にさえ、俺は敵わなかつた。もし、哲也の言つ通りだとすれば

俺は、あいつ達等を守れるだろ'つか？

「…成る程、四条の計画、神のカードについて、かなりの情報が掴めた。ありがと。」

「いえ、先輩の頼みですから。お礼つてんなら、今度飯でも齧つて下さい。」

俺にそう笑いかける哲也の顔は、どこか心配そうだった。

「… おう。期待して待つて。上手い飯を喰わせてやる。」

今は、こんな事しか言えない。

s.i.d.e・Aインス

四条銀次。

四条家の創造神計画。

その過程で、神に対する一時的な耐性を見せるものの、完全な耐性を身につけた検体が既にいたため、不完全とされ廃棄される。

四条家から盗んだ資料だ。N.O.・操る」とのできる人間が一人でも欲しい。そう考えてツヴァイを送り込んだ。結果は神を打ち倒す。上々だった。

「失礼します。」

ノックの音と共に、

ツヴァイが入ってきた。

「どうした？」

「いえ、何故あの失敗作を気にしているのか、疑問に思いました…

「彼は失敗作じゃない。我々の計画に必要な人間だ。神を操る力は
必要ない、Ｚｏ．を操れることが重要なんだ。」

「…成る程。失礼しました。」

ツヴァイが去つていく。

そう。彼は必要だ。いずれ神とＺｏ．を束ね、世界を幸福に導くた
めに…。

side：銀次

哲也と別れ、事務所に戻り昼飯を作つていると、チャイムが鳴つ
た。

「おい、銀次いるか？依頼があるんだけどよ。」
扉を開くと、アクセサリーをジャラジャラさせた 柄の悪い男が現
れた。

「お前とはなるべく会いたくなかったよ。」

「うおーいつ一ボソッと悪口言つて扉を閉めるな…！」

「はあ、なんのようだ？由樹。」

「さつき依頼つつたろーー？」

「こいつは比奈ひな由樹ゆき。俺が仕事を始めた頃の探偵仲間だが、とにかく厄介事を持ち込んでくる。ある日は裏取引の調査、ある日は政治家の浮気調査。あげくのはてには二十に取り憑かれた。

「依頼も何も…一応俺ら同業者だよな？毎回思つけど…。」

「探偵は助け合いだろ？」

「あれ？助けてもらつた覚えがない。」

「…………と、とりあえず依頼だ！」

誤魔化しやがつた…と奴を睨んでいると、一枚の紙をつきだした。

「…………政治家のスキャンダル？」

「ああ、こいつは黒い噂が絶たなくてな。不正な取引が無いか確かめて欲しい。」

「こいつは、確か…」

奏太のパソコンを弄る。

「ほれ。こいつの身辺情報。」

「おおーー済まねえ！だが、これで、お前は用無しだあ「オラア

ツー」「ぐえつー」

由樹が俺に殴りかかる。何時もの事だ。こいつは情報をタダで貰おうと、俺を暴力で脅さうとする。

「…お前の強さ、反則くせえよ。」

「はあ…。いい加減止める。この茶番。」

「次は…次は、覚えてるよおおおー！」

と、情報料と依頼の七割を置いて走り去っていく由樹。多分最低な卑怯者なんだろ？が、変な所で律儀な奴なので、俺は嫌いじゃない。強さ、反則くせえよ、か。

俺は、強くない。ただ四条の実験の過程で力が身についただけだ。

かなめのような才能も
奏太のような知識も
譲二のような強運も
哲也のような勤勉さも
由樹のような根性も

あるのは、たまたま身についた力と、異常に對する耐性くらいなもの。

だから、だからこそ

俺が、皆を脅威から守らないといけない。

第9話 探偵の決意（後書き）

今回の話の補足を少し。

神の怒り云々は

グールズの事件です。

初代決闘王者＝遊戯です。多分、神のカードは墓守の一族が守護している。みたいな感じで広まるんじゃないかなあとと思いました。
独自設定です。

神を操るカードは、

GXのペガサスの部下の…誰だったかが使つてました。

感想、評価待つてます。

第10話 少女交流中（前書き）

遅くなりました。

すいません…

次回からデコエル描写をしていこうと思います。

第10話 少女交流中

side：かなめ

入学式が終わり、学校生活の簡単な説明が終わりました。

「よーし、今からクラス歓迎会やる~！」

真子さんは、社交的な性格ではやくもクラスのリーダー的存在となりつつあります。

「「「いえーい！」「」」

男女共に、ほとんどの人が賛成しています。

「じゃ、放課後学校前集合で…！」

リーダーシップだけでなく、活発そうな髪形と、きれいな茶色い目。皆を惹き付ける見た目に少し羨ましく感じます。

授業が終わり、放課後。私達はファミレスで歓迎会をしていきます。

「緋色やーん。私達と一緒に食べよー。」

真子さんと数人の女の子達。

「あ、はい！」

緊張して、つい声に力が入つてしまいました。

「緋色さん、これからどうしべー。」

「あ...せい...やめしゃくお願ひします...」

「敬語じゃなくていいよ。」

「あ、分かりました。」

笑ひ留さん ああ 私としたことが

「うわっ、ジュースこぼしちやつた！ 服が～！」
ジュースをこぼして、嘆く真子さん。

「真子ちゃん」と「かほ」、「ん」、「うへ」、「う」、「た」、「た」、「う」、「う」、「は」、「後は家で洗えば落ちますよ。」

「かなめす」ハ・!・シ!! 抜きできるんだ!?」

いきなり私を讃める真子さん。

「やり方さえ覚えれば、簡単ですよ。」

「緋色さん、すゞーいーー！」

「ふふん、かなめは私の自慢の親友だからなーー！」
「真子が威張る事！？緋色さん、わたしにも教えてーー！」

「那樣，我會……」

side・真子

最初はなかなか打ち解けれなくて少し寂しそうだったけど、かなめももうすっかりクラスに打ち解けてるな！！
かなめにはあたしには無い魅力がたくさんある。 すごい器用で、何でもそつなくこなすし、おしとやかで、とても可愛い。それだけじゃなく

『一度犯した間違いは、次に繋げればいいんです。これからは、本当の希望を見失わないで下さい。』

兄貴を…あたしを救つてくれた。

だから、あたしはかなめがちょっとぴり羨ましい。

「真子ー！ポテト来了よー！」

「おつ！あたしも食べるー！」

今は、打ち上げを思いっきり楽しむぞおー！！

side・ツヴァイ

どうしても、納得いかない。あの男…四条銀次が不可欠な存在？冗談じゃない。私なら、一人であいつ数人分の働きはできる。なのに…

「うーツス。」

「トライか。NO・使いは順調に見つかっているのか？

「今日で五人。とりあえず、たタき潰した。」

「こいつは、馬鹿だが有能な奴だ。

「トライ、四条銀次についてどう思う?..」

「ン? 結構面白いと思つ。あんたの神ヲ倒す奴なんてアインス以来だろ?..」

「そう言えば、我が神を倒した人間は、彼以外では四条銀次しかいな
い。」

「後、ビ」「となくアインスと似てる気がすルんだよねえ。」

確かに、何となく似ている。まさか、彼は...。面白い。四条銀次がただの失敗作でない可能性が出てきた。おそらくそこにアインスが奴を拘る理由がある。

「トライ、お前の仕事、手伝つてやる。」

「マジで!..? 助かるツス!..」

探偵を名乗る奴なら、何人かの決闘者が通り魔に会うのを怪しむは
ず。

私達がN.O.・使いを襲つていけば、奴が首を突っ込んで来るだろ?..
待つていろ、四条銀次...」

side:かなめ

「うう、もう腹一杯...」

歓迎会が終わり、もうすっかり夕方になってしまった。私は、お腹一杯の真子さんを連れて家に帰っている途中です。

「中等部… かあ。かなめさ、どうだった?」

「はー。歸と楽しく迺いせん… だよ。」

「あれ? 敬語直つたの?」

養父との生活で敬語が身について、まだまだ馴れないけど、普通に話せるようになりたいです。

「歸と、普通に話せるようになつたのです… か?」

「ふふ、直つてないじやんー… じや、あたしむせび語りでよんじよー。」

「あ… 真子」

「まだ固こなあ。」

笑顔で話す真子さん、嫌真子ちゃん。

まだまだ道は険しいです。

第10話 少女交流中（後書き）

どうだったでしょうか？

女の子トークってこんな感じかな……？

今回はほのぼのを田指して描いてみました。

感想、評価お待ちしています。

登場人物紹介 2（前書き）

今回は、今後も登場する予定の人物を紹介です。

登場人物紹介 2

設楽 謙二（しだら じょうじ）

性別 男

年齢 21

銀次の高校からの友人。家業を継いで八百屋を営んでいる。

見た目は極の道の人かと間違えるくらい強面。人当たりが良く、子供好きで穏やかな性格で近所の評判も良い。

デュエルは余りしないがとてつもない強運の持ち主で、だいたいのデッキを使いこなせる。

使用デッキは、気分によって変えている。

興野 真子（きょうの まこ）

性別 女

年齢 12

かなめが困っている所を助けて以来の、かなめの親友。

活潑的な見た目で、ショートヘア、綺麗な茶色い瞳をしている。

性格も活潑で、誰とでも仲良くできるリーダー体質。しかし、兄の心配をするなど、繊細な一面も。

使用デッキ【サイバー】

氷室 夕（ひむろ ゆう）

性別 男

年齢 16

奏太の悪友その1。

何事にも無表情で、落ち着いた判断をする。

奏太が男と分かり、学校で唯一驚かなかつた男として有名（本人曰く、かなり驚いたらしい。）

スポーツ万能で、無表情ながら整つた顔立ちをしているので女子人気が高い。成績は中の上くらい。

使用デッキ【戦士族シンクロ】

東雲 葵（しののめ あおい）

性別 女

年齢 16

奏太の悪友その2

成績トップクラスで、男子人気も高いが、奏太に猛烈な愛情をぶつけてくる変人。しかし奏太にはいまいち伝わっていないらしく、何かの儀式か呪いかと思われている。

普段は普通に優等生で、教師からの信頼も厚い。

使用デッキ【ユベル】

十人 成実（とにん なみ）性別 女

年齢 17

奏太の悪友その3

良くも悪くも普通の少女。普通と言われるのを嫌う。女の子らしく、可愛い物好き。

奏太達の間では、癒されると、よくいじられる。進学と同時に年齢が上がり、皆より年上なのが密かな自慢。

使用デッキ【もけもけ】

比奈 由樹（ひな ゆき）

性別 男

年齢 26

銀次の元探偵仲間。現在では、逆に銀次を頼つて情報屋紛いの事をしている。

悪党を気取つてゐるが、要領が悪く、いつも銀次に返り討ちに合つ。銀次曰く、「厄介事を持つてくる男」

一応、喧嘩の腕は中々。

使用デッキ【追い剥ぎハンデス】

伊勢 哲也（いせ てつや）性別 男

年齢 20

雑賀仁朗に引き取られた孤児の一人で、銀次、奏太と面識がある。現在は警察官を勤めており、銀次達と警察を中継している。ドがつくほどの真面目で上司から重宝されている。銀次のことを先輩と慕つている。

デュエルは、余り経験が無く、初心者同然。

興野 凪（きょうの なぎ）性別 男

年齢 19

興野真子の兄で、プロデュエリスト。期待の若手だったが、負け越しが続き、孤児で頼りの無い事で焦り、N.O.に取り憑かれる。現在は、かなめによつて救われ、中堅クラスの実力者として復活した。

元々優しい性格で、人を思いやる力が強かつた為、N.O.に完全には憑依されなかつた。

使用デッキ【代償ガジェ】

登場人物紹介 2（後書き）

トライ、ツヴァイ、アインスは、話がもう少し進んでから紹介を書こうと思っています。

感想、評価お待ちしますー！

第1-1話 何度ぶつ倒しても（前書き）

今回、ネタ満載で
奏太が意味不明となつてしましました。
デュエル回です。

第11話 何度ぶつ倒しても

side：銀次

「ふうん、通り魔ね。」

新年度から数日、奏太達が学校に行っている間に老人から依頼が来た。

「はい。このところ、デッキを持つている人間が続けて数人襲われる事件がおきます。警察も調査しているようですが、探偵の力を借りたいと……。」

「わかりました。ところで、被害者に何か共通点は？」

「コーヒーを啜りながら聞く。かなめほど上手く淹れれないな。

「被害者は共通して、N.O.がどうのこうのと……。」

「ぶつ！」

「「ごまつ」ごまつ！N.O.ですか。分かりました。任せください。」

「助かりました。あ、私は被害者の会を代表して来た飯塚と申します。」そうして、飯塚という老人は帰つて行つた。

「N.O.・使いを狙う通り魔？あいつらか……？」

ツヴァイの顔が思い浮かぶ。

「……奏太達が危ない。」

NO.の事を知っているのは、俺達を含め奴等ぐらいのなもの。そして…

「ホープ回収し忘れた…。」

NO.を所持しているのは、仁朗さんから直接NO.を譲り受けた奏太。

後、皿を倒してNO.をてにいたかなめ。

俺だけじゃ足りない。そう思い、俺は電話を掛けた。

side・奏太

…やややややばこって。

「私どコホールをしる。ともなぐば…」

と、黒いスーツの大男が素手で壁に穴を開ける。学校帰り、皆と別れてちよつと寄り道しただけなのに…！

「…やなこつたい…！」

逃げるが勝ち。不意をつき僕は反対側へ走った。

「させん…」

はやつ…？もつすぐ後ろのあたりなんですが…？

「ていつ…」

とりあえず、鞄で頭を打つ。少し強すぎたかな?
「ぬうう、クソガキがあ！…殺す（ボソツ

「ボソツ

今殺すつて言つたよ！？

デュエルは！？

てか、哲也兄イ仕事しろ！

なんて内心でツツコンでいるとい、行き止まりだつた。

「さあ…もう逃げられまい。」

いや、マジでヤバい。このままじゃ…

「無駄あつ！」

突然、おっさんが倒れた。何事？DIO様？

「奏太、大丈夫か？」

そこにはいるのは、いつも通り無表情な我が悪友の夕だつた。

「無駄無駄無駄あつ！」

……あれ？殴つてんの葵？人間技じゃねえ！

「葵が急に奏太が危ないとか言つて、一いつ時に走つて行つたんだよ。

お前、盗聴器でもついてんじゃね？」

思わず体を探つてしまつた。成実は隅つこで警察呼んでる。うん、
普通普通。

「！」のひー・

「 」 「 葵 」 「 ちやん 」

DIOさ…葵が倒れる。僕達は急いで駆けつける。

「肩の分際で…！俺はてめえら『ゴミ』に構つてゐ暇なんてねえんだよ！…そんなにこの小娘が大事かあ…！」

ブツン。何かがキレた氣がする。

「おい。」

「あん？」

「デュエルしろよ。」

黙つて聞いてりや人を肩だの『ゴミ』だの…お前なんかより、葵の方がよほど価値があるつての。そして…僕は男だ…！

「そうだ。最初からそういう言えば、「うん。分かった。早くしよつ。」

ちつ…」

男の声が耳障りだ。早く潰そう。

「「デュエル…！」」

雑賀奏太 LP 8000

手札5枚

男A LP 8000

手札5枚

「先行は俺、ドローー！！俺はフィールド魔法、ダークゾーン発動！カードを伏せ、ハウンド・ドラゴン召喚！」

ハウンド・ドラゴン ATK1700 2200

「お前の『トッキはトークンだと聞いた。ならば、強化の暇を『えず』に序盤から攻撃力の高いモンスターを召喚すれば問題ない！更に禁止令！スライム増殖炉を指定！』

「…………。」

「そして、愚かな埋葬！『トッキから、ゾンビキャリアを墓地へ！ターンハウンド！…』」

男A LP 8000

手札2枚

「…僕のターン。僕は、手札から愚かな埋葬を発動。『トッキからコベルを墓地へ。』

「トークンじゃないだとぉ…。」

「あんたはいきなり『デュエルを挑んできた。対策してるだろ？』となんて、簡単にわかる。さつき葵から押借したんだ。さらに、モンスターをセット。カードを四枚セットし、ターンハウンド。」

雑賀奏太 LP 8000

手札0

「ぐ…俺のターン！俺はもう一枚ハウンド・ドラゴンを召喚…！」

ハウンド・ドラゴン ATK2200

「更に、ゾンビキャラリアの効果！手札一枚を『セットアップ』に戻し、特殊召喚！」

ゾンビキャラリア ATK400 900

「だつたら、罠カード、バトルマニア。あんたはこのターン攻撃を強制される。更にチヨーン、エネミーコントローラー。セットモンスター、クリッターをリリース。ゾンビキャラリアのコントロールを得る。そしてクリッターの効果、デッキからキラートマトを手札に。」

「はんつ！シンクロさせねえつもりか？構わねえ！ハウンド・ドラゴンでゾンビキャラリアを攻撃！」

「罠発動。リミット・リバース。墓地からコベルを特殊召喚！」

コベル ATK0 500

「タイミングを間違えたな！ハウンド・ドラゴン、攻撃対象をコベルに変更！」

男A L P 5800

「なに！？なぜ俺のライフが…！」

「コベルの効果、ナイトメア・ペイン…。コベルは戦闘では破壊されず、ダメージも受けない。更に、相手は攻撃したモンスターの攻

撃力分のダメージを受ける。」「

「何ーその為にバトルマニアを…ならば、一體目のハウンド・ドラゴン、ゾンビキャラリアを攻撃！」「

「罠発動、シフトチェンジ。攻撃対象を、ゴベルへ。ゴベル、ナイトメア・ペイン！」「

「ぐううう！」「

男A LP3600

「クソが…！俺は一体のハウンド・ドラゴンをオーバーレイ！破滅の化身よ、今こそその忌まわしき力を發揮しろ！エクシーズ召喚！NZO・30破滅のアシッドゴーレム！」「

破滅の象徴、とでも言ひべきゴーレムが、体から酸を撒き散らしながら出てきた。

「NO…？」「

「そうだ…このカードで俺は世界を破滅させてやる…ふははははは…俺はターンヒンド…そして…ゾンビキャラリアは俺の元へ…！」「

男A LP3600

手札1枚

「NZO…か。僕のターン。僕は、ゴベルを守備へ変更。リミットリバースの効果でゴベルを破壊。」「

「馬鹿め！自分からゴベルを破壊しやがった…！」「

「ユベル - Das Abscheulich Ritter。」

ユベル - Das Abscheulich Ritter ATKO
500

双頭の竜を従える、異形の悪魔が現れた。

「何！？どういう事だ！」

「ユベルは痛みを糧に進化するモンスターだ。破壊されると、手札・デッキ・墓地から特殊召喚される。僕はターンエンド。このエンドフェイズ、ユベル - Das Abscheulich Ritter の効果発動！このモンスター以外のフィールド上の全てのモンスターを破壊する！フェロー・サクリファイス！！」

雑賀奏太 LP 8000

手札1枚

「ば…化け物め…俺のターン！俺は、カードをセット、ターン…エンド。」

？を倒されてショックみたいだ。だが、僕の怒りは収まらない！

「僕のターン！」「罠カード、サンダーブレイク！手札を一枚捨て、その化け物を破壊する…！これで仕切り直しだ！」「ユベルの効果は発動しない。」

「はっ！最後の最後でミスしやがった！」

「…おまえの手口は素晴らしいかった！戦術も！リアルファイトも！だが！しかし！まるで全然！！この僕を倒すには程遠いんだよねえ！！」

「でたよ、奏太の悪い癖。シリアルスかと思つたらこれだよ。」

「夕が何か言つてるけど、気にしない！」

「ユベル・Das Abscheulich Ritterが破壊されたことにより、愛されいらなくなつた絶望、機皇帝グランエルを手札から特殊召喚！グランエルは、自分のライフの半分の攻守を得る！」

機皇帝グランエル ATK4000

「あ…あ…」

「希望を与えられ、それを奪われる。まさにDEATH GAME！！機皇帝グランエルで攻撃！！グランドスローター・キヤノン！」

「あ、ああああああ！！」

男A LPO

「何度もぶつ倒しても、ぶつ倒しても！俺の怒りは収まらない！」

「う、うわあああ！！」

男が逃げていく。久々に頭にきたな。ま、最後のセリフはネタだけど。葵は大丈夫かな？

「葵、大丈夫かい！？」

「ええ、貴方の愛が…」

「うん、大丈夫そうだね！」

「デッキと云ふ、性格といふ…ビルのヤンデレだよ。

「とにかく、皆ありがと。とりあえず、僕は銀さんとこに行つてくれよ。」

「そうだな。といひで、助けてやつた俺らに対して、何か無いのか？」

「私なんて、怪我したのよ？」

「私と夕君見てただけだけね…。」

忘れてた。皆が素直じゃないことを…成実さん、君はなんて謙虚なんだ！普通にいい人だよ…！

「今、普通つて思つたでしょ？私もなんか奢つてもらつからー。」

しまつたあー？てか、心読んだー？

銀さんのことだから、既に手はつってるだらうけど、かなめちゃんが心配だなあ。とりあえず、銀さんに報告だ！
僕は、三人を連れて事務所へ帰つた。

第1-1話 何度ぶつ倒しても（後書き）

男のテックキはトークンメタのローレベルビートです。

葵のテックキはユベル中心に機皇帝が愛を失つたうんぬんで、愛繫がりとして入つてます。

感想、評価お待ちしてます。

第1-2話 暴動、街にて。（前書き）

今回、アインスの正体に迫ります。
分かる人は分かるかもしません。

真子の初デュエル回でもあります。

第1-2話 暴動、街にて。

side：かなめ

「私とデュエルしなさい！」

放課後、アカデミアを出ると、いきなり女の子がやつて来て言いました。

「へ？ 私？」

「そうよー、あんたから私と同じカードを見てにいれないと……」

「む？ 何か訳ありっぽいな！ あたしとデュエルしない？」

真子さ…ええと、真子ちゃんが話に入る。

「なんであんたとーー？」

「デュエルすれば、相手がわかる。アカデミアでは伝説になつた人の言葉だー！ さあ、あたしとデュエルーー！」

「むう、分かつたわ。」

「「デュエルーー！」」

興野真子 LP 8000
手札5枚
女の子 LP 8000
手札5枚

「私のターン！私は、永続魔法、凡骨の意地を発動！そして、ジエネスティックワークーウルフを召喚！」

ジエネスティックワークーウルフ ATK2000

「私はこれで、ターンエンド！」

女の子 LP8000

手札4枚

「よし、あたしのターン！」

確か、真子ちゃんのデッキって…。

「あたしは、サイバー・ラーゴアを召喚！」

サイバー・ラーゴア ATK400

……サイバーデッキ。昔は一つの流派として有名だったけど、今は廃れてしまつたんだつけ。ハイリスクだけど強大なパワー。豪快な真子ちゃんらしいと思います。

「カードを伏せてターンエンド！」

興野真子 LP8000

手札4枚

「サイバー流？今は余り聞かないから、消滅してるとかと思った。」

「まだサイバー流は消えちゃいない！――リスクトデュエルで、あたしはこのデッキと強くなるんだ！」

「ふーん、私のターン。凡骨の意地の効果、ドローしたカードが通常モンスターの場合、更にドローできる！今引いたのはブラッドヴァルス。ドロー、セイバー・ザウルス。ドロー、ラビードラゴン。ドロー…これで打ち止めか。」

女子子 LP8000

手札8枚

「そして、ブラッドウォルスを召喚。」

ブラッドウォルス ATK1900

「バトル。ブラッドウォルスで攻撃！」

「サイバー・ラーゴアの効果、あたしはダメージを受けず、デッキからサイバー・ラーゴアを特殊召喚…」

「だったら、ワーウルフで攻撃！」

「効果でもう一体のラーゴア！」

「…バトルフェイズを終了。魔法カード、二重召喚。一体をリリー・ス、ラビードラゴンを召喚！」

ラビードラゴン ATK2950

「カードを伏せて、ターンエンド。」

女子子 LP8000

手札5枚

「中々やるなー。あたしのターンー。あたしは、サイバーディレクションシガ
アイを召喚ー。」

サイバードラゴンツヴァイATK1500

「サイバードラゴン・シヴァイの効果、手札の融合を見せる」と、このカードをサイバードラゴンと扱う！魔法カード、融合！手札のサイバードラゴンとサイバードラゴン・シヴァイを融合！サイバーツイン・ドラゴンを融合召喚！」

サイバー・ツイン・アーティス ATK2800

手札2枚

真子ちゃんの場に双頭の機械竜。しかし……

「そいつじゃ、ラビードラゴンに勝てないよ。」

「あたしの場の機械族の攻撃力を二倍にするよー！」
一慌てない慌てない。バトル！ 伏せてた速攻魔法リミッター解除！

サイバー・ツイン・ドラゴンATK5600

「ラジードラゴンに攻撃！エターナル・ツイン・バースト！」

۱۷۰

「サイバー・ツイン・ドラゴンは2回攻撃ができるー。いつかえー！」

女子 LP5350

「い、嫌だ！速攻魔法、収縮！！…つうわあ！」

サイバー・ツイン・ドロゴン ATK2800

女の子 LP2550

「んー。じゃ、カードを一枚伏せてターンエンド・リミッター解除の効果で、あたしの場の機械族を全て破壊する。」

興野真子 LP7000

手札0枚

…女の子の様子が、おかしい？

「わ、私のターン…凡骨の意地の効果、今のは千年原人、ドロー…通常モンスターじゃない。」

女の子

手札7枚

「カードを一枚伏せて、手札抹殺…お互い手札を全て捨てて、その枚数分ドロー！」

「あたしに手札はないよ！」

女の子

手札5枚

「勝たないと、勝たないと…私は…」

「何があつたの？誰かに脅されたとか？」

真子ちゃんの様子が、一変して真剣な顔つきになります。

「つるさいつ！私は、伏せていた一枚の思い出のブランコを発動！墓地から一体の千年原人を特殊召喚！」

千年原人ATK2750

「一体の千年原人で攻撃！」

「カウンター罠、攻撃の無力化！」

「くつ、一体千年原人をオーバーレイ！幻惑の眼を持つ支配者よ、敵を惑わせ！エクシーズ召喚！N.O.・1-1ビッグアイ！」

N.O.・1-1ビッグアイATK2600

巨大な目の、幻惑の魔術師が現れました。

side：銀次

奏太、かなめのデュエルから遡る。

俺は奏太達を探す手伝いを頼むため、譲一に電話を掛けようとした。その時、

「余計な人間を巻き込むな。俺達はN.O.・所持者のみを標的にしている。」

どこからともなく、仮面を被った男が現れた。どこか、全体的に褪せた印象をうける。

「お前は？」

「さうだな、アインスとでも呼んでくれ。ツヴァイの仲間だ。」

「……お前、まさか一連のＺ・所持者襲撃事件、お前達の仕業か！？」

「…………ああ。」

「ならば何故そんな事をする！Ｚ・を奪わないのか！？」

「奪つても、使える人間が少ないからな。必要な分だけ所持している。」「……余計に分からない。何故襲撃する？」

「Ｚ・所持者の負の感情から抽出されるエネルギー、それをを集め、世界を『幸福』に導くためだ。」

「どういってことだ？ 神と関係しているのか？」

「まだ知らないくても良い。じゃあな。」

「つ、待て！……」

俺の手が、アインスの仮面に当たり、奴の素顔が明らかになつた。

「！？」

呆氣を取られているうちに、アインスは消えた。奴の顔は

「俺？」

白髪で、全体的に褪せたような印象だが、まるで鏡合わせのよいつ
……俺にそつくりだつた。

side・真子

「……。兄貴と同じ……！」

「あなた、……を……！？」

「やうよー……を手に入れて皆が私を認めてくれるよいつになつた
……なのに……あいつらが他の……を狩らないと、私の……を奪
うつて……！」

女の子の目から涙が流れ落ちる。

あいつらって、銀次さん達が言つてたツヴァイつて奴ら……？

「私は、カードを一枚伏せてターンハンマーを救うつてんなら、
私に負けて、……を出してよー！」

女の子 LP2550

手札3枚

「……、兄貴と同じよいつ、……に汚染されて、依存している！

「……で監が認めてくれる？」「エルはそんなものじゃない！」

サイバー流の目指す、リストクトデュエル。それは、全力で迎え撃
つ事で相手に敬意を表し、理解し合う事！

「あんたに何が分かるの！？ゾンに頼らないと誰も、両親だつて弱い私を見てくれない！」

「デュエルは、相手を尊重するものなんだ！ゾンなんてなくとも、あたしはあなたを見てる！！」

「かなめが私達を救ってくれた。今度は、あたしが誰かを救うんだ！デッキよ…応えて！！」

「あたしがそれを証明する！あたしのターン！……来た！！あたしは、モンスターをセット・ターンエンド！」

興野真子 LP7000

手札0枚

「…なにも出来てないじゃない！私のターン！罷カード、正統なる血統！（例えあの伏せカードが攻撃反応形でも、私の伏せカードはデストラクション・ジャマー。大丈夫！）ラビードラゴンを特殊召喚！更に、ラビードラゴンをリリース！偉大魔獣ガーゼットをアドバンス召喚！」

偉大魔獣ガーゼット ATK5900

「ビッグアイの効果、オーバーレイユニットを一枚取り除く事で、相手モンスター一体のコントロールを得る！テンプレーション・グラムス！」

「させない！速攻魔法、禁じられて聖杯を発動！ビッグアイの攻撃力を400上げる代わりに、効果を無効にする！！」

「ぐ、だつたらビッグアイでセットモンスターを攻撃！」

「セットモンスターはメタモルポッド！お互い手札を全て捨てて、
五枚ドロー！」

「お願い……来て！」

興野真子

手札5枚

女の子

手札5枚

「くつ……ガーゼットで攻撃！」

「うう……。」

興野真子 LP 1100

「私は、カードを一枚伏せ、ターンエンド！」

女の子 LP 2550

手札4枚

結構手痛かつたな……。

でも、これで全て揃つた！

「あたしのターン！速攻魔法、サイクロン！今伏せられたカードを

破壊！そして、死者蘇生！墓地からサイバードラゴンを特殊召喚！

サイバードラゴン ATK2100

「そして、プロトサイバードラゴンを召喚！効果で、サイバードラゴンとして扱う。」

プロトサイバードラゴン ATK1100

「これがわたしの全力！魔法カード、パワー・ボンドを発動！」

「パワー・ボンド…！？」

「手札のサイバードラゴン、場のサイバードラゴン、プロトサイバードラゴンを融合！サイバー流奥義、サイバー・エンド・ドラゴン！」

サイバー・エンド・ドラゴン ATK8000

「パワー・ボンドの効果で、攻撃力は二倍！！バトル、サイバー・エンド・ドラゴンで、ビッグアイを攻撃！届け！エターナル・エボリューション・バーストオオオ！」

「きやあああ…！」

女の子 LPO

「楽しい、良いデュエルだつたよ！」

指を前に出し、伝説の彼を真似したポーズをする。ちょっと恥ずか

しいな。

「……本当に……？」

「ん？」

「本当に、私何かと友達になってくれる？」

「当たり前じゃん！ 一度『テュエルしたら友達！』今度はＺｏ・なんて無しでやるつよーーー！」

「あり…がと…。」

女の子が、涙を流してお礼を言つてくれる。よかつた。救えたんだな…。

「真子ちゃん！」

かなめが駆け付けてくる。

「おう、はい、Ｚｏ・のカード。」

「あ、ありがとう。銀次さんの所に…」

「行力せねえッスよ！」

突然、男が一人現れた。 一体どこから…？

「せつかク街中のＺｏ・所持者を暴れさせてるんだー！まだ、四条の所には行かせねッス！」

「あなたがあの子を……だつたら……」

かなめがデュエルディスクを構える。

「ハツ面白Hつ！」

「「デュエル！」」

s.i.d.e.・譲二

俺、設楽譲二の朝は遅い。何故なら、この所我が店には閑古鳥が鳴いていて、今日は休みとしているからだ。

「ん……外が騒がしいな……。」

外から聞こえる声が気になり、外に出てみる。

「な……んだこりや？」

外では、沢山の人間がデュエルをしている。これだけなら普通の光景だ。なにせ、この世界はデュエルの腕がものを言う。ただ、変なのは……

「ははははー行け、N.O.・所持者どもよーこの街を力オスに陥れてやれー！」

俺の店の前で高笑いしている女性だ。

「あのおー、何してんすか？」

「ははは…あ。」

俺に気付いた女性は、赤面し、走って逃げて行つた。

第1-2話 暴動、街立て。（後書き）

女の子の「トリッキ」は

【凡骨ビート】です。

後に順レギュラー化するかもしません。

第1-1話の間違い指摘、ありがとうございます！――早速修正いたしました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8735z/>

遊戯王～Parallel Story～

2012年1月12日20時56分発行